



TITLE:

第10次ブータン友好訪問団調査報告(フルバージョン): 2013年1月18日-28日

AUTHOR(S):

吉原, 博幸; 加畑, 理咲子; 谷, 悠一郎; 西垣, 昌代; 藤澤, 道子; 道和, 百合; 平田, 義弘; ... 千石, 真理; 丸山, 晃央; 須永, 恵美子

CITATION:

吉原, 博幸 ...[et al]. 第10次ブータン友好訪問団調査報告(フルバージョン): 2013年1月18日-28日. ヒマラヤ学誌 2014, 15: 1-63

ISSUE DATE:

2014-03-28

URL:

<https://doi.org/10.14989/HSM.15.1>

RIGHT:

第10次ブータン友好訪問団 調査報告

2013年1月18日～28日

吉原 博幸¹⁾, 加畑 理咲子²⁾, 谷 悠一郎³⁾, 西垣 昌代⁴⁾, 藤澤 道子⁵⁾, 道和 百合⁶⁾,
平田 義弘⁷⁾, 小野 加奈子⁸⁾, 千石 真理⁹⁾, 丸山 晃央¹⁰⁾, 須永 恵美子¹¹⁾
(執筆順)

1) 京都大学医学部附属病院, 2) 京都大学医学部（学生）, 3) 京都大学農学部（学生）,
4) 京都大学事務部（宇治地区）, 5) 京都大学東南アジア研究所, 6) 京都大学医学部附属病院,
7) 京都大学大学院医学研究科（学生）, 8) 京都大学医学部附属病院事務部,
9) 京都大学こころの未来研究センター, 10) 京都大学大学院農学研究科（学生）,
11) 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

=====

目次

=====

1.	はじめに	吉原 博幸	2
2.	日程	加畑 理咲子, 谷 悠一郎	2
3.	国の概要	西垣 昌代	2
4.	医療		
4.1	医療体制	吉原 博幸	6
4.2	高齢者の医療	藤澤 道子	10
4.3	新生児医療、母子保健、予防接種	道和 百合	12
4.4	小児外科、一般外科	平田 義弘	15
5.	教育	小野 加奈子	17
6.	宗教	千石 真理	20
7.	交通	谷 悠一郎	25
8.	自然	丸山 晃央	30
9.	食	吉原 博幸	34
10.	言語	須永 恵美子	38
11.	歴史と文化	加畑 理咲子	42
12.	おわりに	藤澤 道子	45

【資料】

公式行動記録	加畑 理咲子, 谷 悠一郎	46
写真, ビデオリスト (Webリンク)	吉原 博幸	62

1. はじめに

2013年1月18日から28日までの11日間、12名で構成される第10次ブータン訪問団としてブータン王国を訪問する貴重な機会を得た。訪問団は、医師5名、研究者2名、事務職2名、学生3名で構成された。主たる目的は、ブータン王国の医療を中心とした実地調査、特に、標高3000メートルを越える中央部の山村の診療所（BHU: Basic Health Unit）近辺にキャンプを張り、僻地医療の実態の調査と体験を目的とした。初めて訪れる厳冬期の高地であり出発前は相当に心配したが、行ってみると意外に温暖で、村人の暖かい出迎えにも助けられ、快適で充実した調査とブータンの人々との交流を体験する事が出来た。この交流は、その後のブータンからの訪問や、メールなどで現在も続いている。

本報告は、団員で役割分担を行い、ブータンに関するまとまった資料として、後続の訪問団の参考となるよう編纂した。（担当：吉原博幸）

2. 日程

1月18日（金）：日本出発、バンコク泊
 1月19日（土）：バンコク発、パロ着、ティンプーへ移動
 1月20日（日）：ティンプー観光、病院見学
 1月21日（月）：サムテガンへ移動
 1月22日（火）：サムテガンにてBHU、村散策
 1月23日（水）：サムテガンにて
 BHU・患者の家、寺院・村散策
 1月24日（木）：ポプジカへ
 1月25日（金）：ワンデュ・ポダン、プナカ
 1月26日（土）：ティンプー、パロ
 1月27日（日）：ブータン（パロ）を発つ
 1月28日（月）：関西国際空港到着

詳細記録は資料として後述したので参照されたい。（担当：加畑理咲子、谷悠一郎）

3. 国の概要

【地理と気候】

幸せの国ブータンは、北側を中国（チベット）、南方をインドという2つの巨大な国に挟まれた、

東西に広がるヒマヤラの山岳地帯に位置する王国である。

面積は、38,394平方kmで、スイスとほぼ同じ、日本の10分の1、九州とほぼ同じぐらいの広さで、その72.5%を森林が占める。

南部の山ろくに平らな細い土地がある以外、国土はほとんど山脈の中にあり、北部は中国のチベット自治区、インドのアルナチャルプラデシュ州と接し、南部はインドのアッサム州、西ベンガル州と接している。

地球上の位置を示す緯度は、およそ日本の沖縄諸島に相当する北緯26度40分～28度15分の間にあり、経度は、東経88度45分～92度10分の範囲にあり、日本との時差は3時間（遅れ）である。

ブータンは南北には約250km程度であるが国内の標高差が大きい。インドとの国境近くは標高200mぐらいであるのに対し、インド国境から北に向かうとすぐに1,000mを超えるような高地となり、ヒマヤラ山脈のそびえる北の国境近くは6,000mを超えるヒマヤラ山脈の高地となっている。

気候は、標高に応じて大きく異なるが、大ざっぱに分けて6～8月が雨期、9～5月が乾期となっている。ティンプー（首都）、パロ、プナカ、トンサ、ジャカル、モンガル、タシガンなどのブータンの主要な町は、海拔1,500mから3,000mまでの東西に広がる地帯に存在しており、日本とさほど変わらない気温であるが、1年を通して寒暖の差は激しい。また、標高差による寒暖の変化に加え、山地特有の昼間と夜間との温度差も激しい。日差しが強く、日向と日陰とではかなりの体感温度の差がある。

今回訪問したのは1月で、乾季に当たり、空には雲一つなかった。日差しは強く、日中は少し歩くと汗ばむぐらいの陽気であったが、日が落ちるととたんに冷え込み、夜間は氷点下となり、1日の寒暖の差を身を以て体験した。

【民族と言葉】

国の人口は約72万人で、東ブータン先住民系、チベット系、ネパール系、その他少数民族から成っている。

・ツァンラ（Tshanglas）：東ブータンの先住民といわれている。ツァンラ語を話し、モンガル、タシガン、タシヤンツェ、ペマ・ガツツェル、サムドップ・ジョンカルに主に居住している。農業と畜産で生計を立てており、女性を作る絹や生糸の美しい編み物が有名

・ンガロップ (Ngalops) :

西ブータンの6つの地区に居住しているチベット系の人々。ブータンの公用語であるゾンカ語を洗練させたンガロップ語を話す。主に農業で生計を立てており、穀物の他に、ティンブーやパロでは現金収入を得るためにリンゴを栽培する人たちもいる。

・ローツァンパ (Lhotshampa) : 南部の山ろくに居住するネパール系の人々。19世紀の始めに労働者としてネパールから移住してきたと言われており、ネパールの言語でヒンズー教に使われているローツァンパ語を話す。生計は農業に頼っており、ジンジャー、カルダモン、オレンジといった商品作物を栽培している。

・その他の少数民族: 中央ブータンに居住する BUMTAPPA (Bumthaps) や KHENGPAS (Khengpas)、LUNTCHU (Luntchu) に居住する KURTOEPS (Kurtoeps)、東ブータンの MELE (Mele) や SAKTEN (Sakten) に住む BROKPA (Brokpas)、BLAMI (Blami)、SAMTSE (Samtse) に居住する DOYA (Doyas)、WANGDUE (Wangdue) ・PODAN (Podan) のラカ村に住む MONPA (Monpas) 等

それぞれの民族に独自の言語が存在するが、ブータン政府は主に西ブータンで使われていた言語であるゾンカ語を公用語に決めて、国のアイデンティティを保持するためにその普及に力を入れている。しかし、教育の場では初等教育から英語が使われており、ゾンカ語の他に英語も公用語となっている。

【国の成り立ち】

チベットからブータンにかけて、7世紀ごろから17世紀までチベット仏教のいろいろな宗派が入り乱れて支配していたが、1616年チベットから亡命したドゥルック派の僧であるンガワン・ナムゲルが、ブータンを政教一致の国家とするための枠組を作ることに成功。

1907年、ブータンの中央に位置するトンサ郡の豪族ウゲン・ワンチュクが、支配的郡長として台頭し、ブータン全土への影響力を強めて世襲藩主に就任し、初代の国王となった。

その後、1952年に即位した第3代国王は、農奴解放、教育の普及などの制度改革を行い、近代化政策を開始したが、1964年、地方豪族間の争いに起因する当時の首相暗殺や、その後に任命された首相による宮廷革命の企み発覚を契機に、首相職が廃止され、国王親政となった。

1972年に16歳で即位した第4代国王は、第3代国王が敷いた近代化、民主化路線を継承・発展させ、

王政から立憲君主制への移行準備を主導。2006年12月に自ら王位譲渡を宣言し、2007年12月に上院選挙、2008年3月に下院選挙を実施し、ブータンに立憲議会制民主主義を確立させた。2008年7月には、国王の定年制も明記したブータン国憲法を發布、同年11月に現第5代国王の戴冠式が行われた。

【国の名前の由来】

現在対外的に用いられている国名「ブータン」の語源についてははっきりとわかっていないようだが、一説には、サンスクリット語で「高原」あるいは「インドの先」を意味する "Bhu-Uttan" であるとされている。また、国名の語源を、同じサンスクリット語で「チベットの果て」「チベットの尾部」を意味する "Bhots-ant" であろうとする説もある。ちなみにこの「ブータン」という名前は、もともと国外の人々がこの国を呼ぶのに使われていた言葉であり、ブータンの人々は自国のことを「雷龍の土地」を意味する「ドゥルク・ユル (Druk Yul)」と呼ぶ。

【GNHと幸せの国】

GNH (Gross National Happiness) 「国民総幸福量」などと訳されている。ブータンは国の方針として、「経済発展によるGNPの増大を目指すのではなく、国民全体の幸福を最も重視する」と宣言し、その実現のために、4つの柱を基に、9つの指標を設け数値化を図っている。政策は、Gross National Happiness Commission (GNH委員会) が、政府の司令塔として立案している。

ブータン国民に対するアンケート調査の結果として、多くの国民が自分は幸せであると感じていると報じられており、またブータンを訪れた人の多くが、ブータン国民は親切で愛想がよく、幸せそうであるという印象を受けたことから、ブータンがしばしば「幸せの国」と呼ばれるようになった。

4つの柱 (Four Pillars)

- ・ Sustainable and equitable socio-economic development 環境を持続しながら、衡平で公正な社会経済の発展
- ・ Conservation of our fragile Himalayan ecology 壊されやすいヒマラヤ山脈地帯の自然環境の保全
- ・ Preservation and promotion of our culture ブータン固有の文化の保護と発展
- ・ Enhancement of good governance より優れた統治の実現

9つの指標（Nine Domains）

1. 心理的幸福
Psychological Wellbeing
2. 時間の使い方とバランス
Time Use and Balance
3. 文化の多様性
Cultural Diversity and Resilience
4. 地域の活力
Community Vitality
5. 環境の多様性
Ecological Diversity and Resilience
6. 良い統治
Good Governance
7. 健康
Health-
8. 教育
Education
9. 生活水準
Living Standard

【開発5カ年計画】

1961年から、政府は開発5カ年計画を次々と発表して、ブータンの近代化を進めており、現在は2008年から2013年までの第10次開発5カ年計画が実施されている。開発5カ年計画には政治、経済・産業、教育・文化、医療、通信、国土環境、道路など、行政のすべての面での発展計画が記述されている。

ブータンの最も重要な産業は、水力による発電事業であり、現在の水力発電の能力は、全部合わせて150万KWを越えているが、2020年までにその能力を飛躍させて、1,000万KWを目標とする計画が立てられている。発電した電力のほとんどが隣国インドに輸出され、水力発電は国家の重要な外貨獲得の財源となっている。

国の近代化は近年着実に進んできており、国際化、農村から首都への人口集中、インターネットや携帯電話などのIT機器の急速な普及などが見られる。このような状況の中で、政府は伝統的な精神文化の保護および継承を、政策として推進している。

【人々の生活】

宗教については、国民の一部のネパール系の人たちはヒンドゥー教を信仰しているが、国の主要な宗教はチベット仏教である。ブータンの人は仏教を深く信仰しており、伝統文化や生活習慣にはチベ

ット仏教が深く根づいている。人々は生命の輪廻転生（reincarnation）を信じ、お墓を作らず、すべての生き物の殺生を嫌う。ブータン式の農家には、仏壇のある仏間があり、ブータンのどこの村にも寺院がある。

ブータンで最も人気のあるスポーツは、アーチェリー（洋弓）で、単に競技の技術を競うというより、競技の中に踊りを取り入れるなど、社交的なスポーツとなっている。

ブータン全土は、20のゾンカックという日本の県に相当する地方行政区に分かれていて、それぞれのゾンカックに、たいていひとつのゾン（城）が存在している。ゾンは、以前は軍事的な要塞の役割があったが、現在は宗教的な役割と地方行政の庁舎の役割を持っている。言わば、お寺に県庁が同居したようなものと言える。それぞれの村や町のシンボリックな建物で、観光スポットとして人気のあるものが多い。首都ティンプーにある巨大なゾンがタシチョ・ゾンで、ブータン宗教界の最高位であるジュ・ケンポが居住し、国王もそこで執務を行っている。

ブータンの人々はゾン、学校、政府機関、寺院および公的な行事が行われる場所では、男性はゴ、女性はキラという民族服の着用が義務づけられている。さらにゾンに入るときや寺院や役所で高い地位の人に会うときなどは「男性はカムニというスカーフ、女性はラチュという肩掛けを着用しなければならない」という、正装に対する定めがある。一般男性のカムニは白色ですが、王様や法王、修道院長のカムニは黄色、首相はオレンジ、裁判官は緑、地方行政官は白い線が入った赤いカムニなど、厳密ではないが色が社会的な地位を表している。ラチュには男性のカムニと異なり、色による区別はなく、美しい刺繍がなされていて女性のおしゃれのポイントにもなっている。

【ブータンと日本の関係】

1981年に、それまでにブータンについて学術調査・研究を行ってきた人々が中心になり、「日本とブータン間での民間レベルの交流を通じて両国の相互理解を深め、友好親善を促進する」ことを目指し、日本・ブータン友好協会（初代会長 桑原武夫京大名誉教授）が設立された。

1986年、日本とブータンとの間に正式に国交が樹立され、1989年には第4代国王が昭和天皇の大喪の礼に出席し、1990年の天皇陛下の即位の礼にも来日して、民族服を纏った来賓は特別の注目を浴びた。

ブータンの発展を援助するためのボランティアとして、JICA（国際協力機構）から1988年から青年海外協力隊（JOCV）が、2001年からシニア海外ボランティア（SV）が、毎年派遣されている。

2011年の日本人観光客は3,943人であり、米国の6,266人に次いで第2位であったが、2011年のジグミ・ケサル国王陛下及びジツェン・ペマ王妃の国賓訪日以降、日本人観光客が急増しており、2012年1月～6月の期間で、日本人観光客数が3,587名を記録し、外国人観光客数の中で最多となっている。

【所感】

訪れたのは1月で、ティンブーや道路や家など建設ラッシュで土ぼこりがすごかった。自然は大変すばらしく申し分なかったが、衛生面とごみが少し気になった。牛や馬、犬が放し飼いになっているので、道端に糞が当たり前のように落ちている。今回訪問したのは乾季だったので、匂いは気にならなかったが、雨季だと大変だろうなというのが素直な感想である。また、道端にはお菓子の包装紙や日用品が雑多に捨てられていた。自然の素材を使っていたときは、どこに捨てても自然に還るので問題はなかったと思うが、ビニール、セロハン、プラスチックなどのごみはそうはいかない。ごみの処分方法が周知されていないので、これまでと同じように、無造作に道端や溝などに捨てられていたり、焼かれたりしている。

衛生環境の改善とともに、ごみ問題への対応も大きな課題と思われた。（担当：西垣昌代）

【参考文献】

1) Lily Wangchhuk: Facts about Bhutan - The land of the Thunder Dragon 外務省ホームページ：

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/asia.html>

2) ブータン王国名誉総領事館：

<http://bhutan-consulate.org/index.html>

3) ブータン政府観光局：

http://www.travel-to-bhutan.jp/about_bhutan/media

4) ブータンミュージアム：

<http://bhutan-npo.asia/>

【参考データ】

表1 ブータン王国の概要

面積	38,394 km ² (九州とほぼ同じ)
森林地帯	72.50%
人口	約72万人（ブータン政府資料2012年） 都市人口（21%） 地方人口（79%）
人口密度	18.75人/ km ²
首都	ティンブー（Thimphu）
民族	チベット系、東ブータン先住民、ネパール系等
言語	公用語はゾンカ語（Dzongkha）、英語も広く使われている
宗教	チベット仏教（ドゥク・カギュ派）、ヒンドゥー教
通貨	ニュルタム（NU, Ngultrum）（インド・ルピーと同価）
政体	立憲君主制
元首	ジグミ・ケサル・ナムギャル・ワンチュク国王陛下（第5代）
議会	二院制（上院25議席、下院47議席）
主要産業	農業（米、麦他）、林業、電力
国樹	イトスギ（Cupressus torolusa）
国鳥	ワタリガラス（学名 Corvus corax）
国花	ブルーポピー（Meconopsis horridula）
国技	アーチェリー（Archery）
国の動物	ターキン（burdorcas taxicolor）
日本との関係	1986年 3月 外交関係樹立。 1988年 3月 在大阪ブータン王国名誉領事館設置。 2000年 3月 在大阪ブータン王国名誉総領事館となる。（2003年閉鎖） 2004年12月 在東京ブータン王国名誉領事任命（2007年2月閉鎖） 2010年 4月 在東京ブータン王国名誉総領事館、在大阪ブータン王国名誉領事館、在鹿児島ブータン王国名誉領事館設置。

4. 医療

4.1 医療体制

【国家経済と医療】

ブータンの医療は、日本と比較して大変遅れていると言わざるを得ない。それは、両国の経済規模の比較からも容易に理解出来る。日本のGDP 500兆円と比べるべくもないので、ブータンと同規模の人口（約70万人）の島根県と比較してみると、GDPは、島根県が2兆5000億円、ブータンが1300億円。一人当たりGDPは、島根県が339万円（日本平均：385万円）、ブータンは18万7000円と、約18倍の格差がある（表2）。ブータンの物価は日本の1/10と低いので、生活用品についてはそれほど差はないが、医療器具や薬品は国際的に高価なので、やはり医療環境の整備は困難である。

表2 ブータンと日本の経済規模比較

	ブータン	島根県	東京都
人口（万人）	69.7	73.7	1,323
GDP	1300億円	2兆5000億円	85兆2016億円
GDP/人	18.7万円	339万円	644万円
人口密度（人/平方キロ）	18	105	6,040

【医療機関】

ブータンには、いわゆる民間の医療機関は存在しない。すべて国家、自治体（県）が病院などを建設し運営している。医療機関は、大規模～小規模まで、次のような構成となっている。

Referral Hospitals: 3、Dzongkhag Hospitals (Regional, District): 28、Grade I BHUs: 15、BHUs: 163、out-reach clinics: 485

（注）BHU: Basic Health Unit

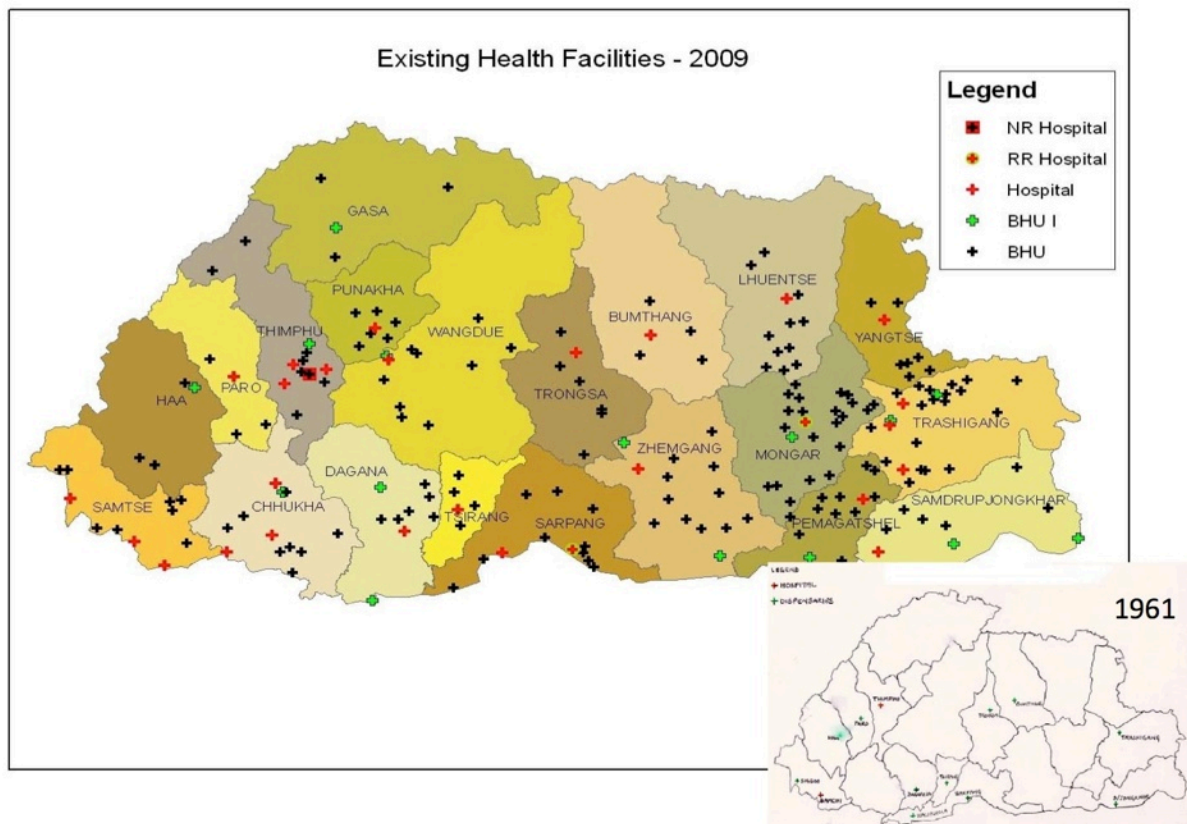


図1 2009年のブータンの医療機関。
1961年と較すると飛躍的に整備が進んだ。

National referral Hospitalはブータンのトップレベルの病院で、首都Thimphuを初めとして、Mongar県、Sarpang県に計3カ所、Regional Hospital、District Hospitalは県レベルの病院で28カ所、BHU Grade1は15カ所、BHU Grade2は村単位の診療所で163カ所設置されている（図1）。医師が常駐しているのは、District Hospitalまでで、専門医はRegional Hospitalまでである。BHU Grade1にわずかに医師の配置があることもあるが、基本的にBHUには医師はいない。BHUの配下のOut-Reach Clinicが485あるが、ここには医師はおろかスタッフさえも居ない。BHUのスタッフが、月1回巡回する運用となっている。

首都ティンブーのReferral Hospitalであるティンブー病院でさえ、CT1台、MRI1台があるのみで、国内の他病院には全くない。ティンブー病院は、病床数350、診療科数20、年間入院患者数11,700、年間延べ外来患者数38万4000、平均在院日数6.4日。ICUはティンブー病院に1施設ある以外、国内には存在しない。心臓外科（冠動脈外科）もなく、狭心症、心筋梗塞などについては主として内科的治療のみを施すことになる。場合によってはタイやインドに救急搬送するしか手段がない（90%がインド、残りがタイ）。海外に送った疾病の上位5疾患は、上から「悪性新生物」「慢性リウマチ性心疾患」「腎不全」「先天性心疾患」「頭部外傷」となっている（2005年の統計）。

BHUには、上級看護師2名、看護師1名、職員1名の合計4名が常駐し（写真1）、訪れて来る村人達に対する外来診療（聴診、打診、心電図、簡単な処方程度）、受け持ちの村を回る巡回診療などのほか、予防衛生教育を行っている（写真2、3）。一つのBHUが受け持つ村民は、およそ4000名ほどとなる。BHUには、要請に応じて、基幹病院から医師が訪問する。これとは別に、医療支援として京大のチームが年3～4回訪問している（写真4）。第10次訪問団も、BHUでの外来診療を行った（写真5）。処方箋は、形式は特になく、白紙に走り書きしたような簡単なものである（写真6）。



写真1：サムテガンBHUのスタッフ（3名）と

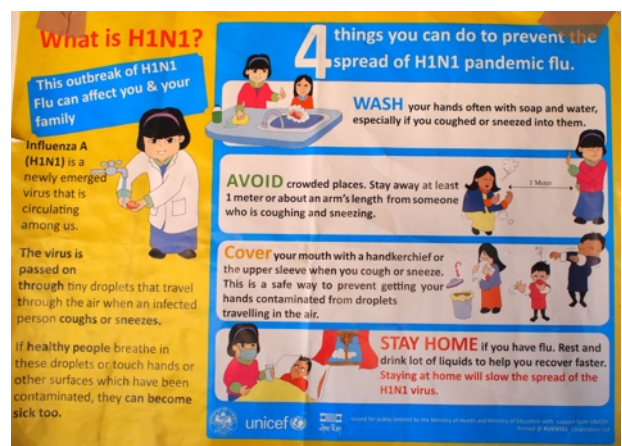


写真2：衛生教育ポスター：
手洗い、マスクの使い方など

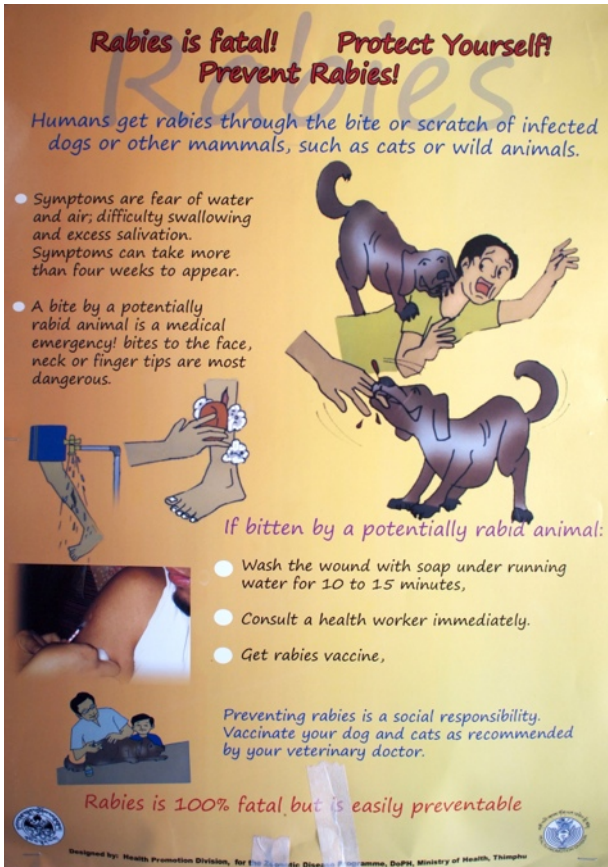


写真3：頻発する狂犬病と咬傷対策のポスター



写真4：BHUでの医療活動。

京大から派遣された医師とスタッフ。

【人的資源】

ブータンの医師数（外国人医師も含めて）は全部で181名。人口10万人あたり医師数は2.6人と少ない（日本は人口10万人あたり21人）。産婦人科医は全国で11名。そのうち6名がティンブー病院に勤務している。施設分娩はまたメジャーではないが（施設分娩率70%弱）、年間12000件の施設分娩の1/3がティンブー病院に集まる。正常分娩は看護



写真5：サムテガンBHUでの外来診療風景
（英語／ゾンカ語をナースが通訳）

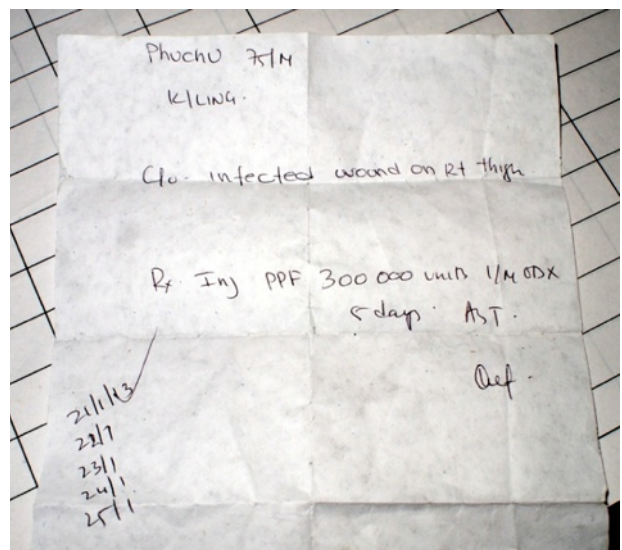


写真6：白紙に手書きの処方箋

師のみで対応する。小児科医は全国で7名（日本から派遣の西澤医師を含む）。4名がティンブー病院勤務。NICU担当は西澤医師のみという状況である。2013年度から、京大病院から更に2名の医師と2名の看護師を、東南アジア研究所から産婦人科医師を1名、ティンブー病院に派遣する計画が進んでいる。178のBHUと485のOut-Reach Clinicなどの診療所に勤務するスタッフは、1327名で、一つの診療所あたり2～3名となっている。医師不足対策として、2013年7月に国立ブータン医科大学が開講した。医学科、看護科、健康科学科の3学科体制。医学科は1学年50人で、うち15名はインドからの学生を受け入れるとのことである（医科大学建設がインドからの資金援助を受けているため）。今後のブータンの医療を支える医療スタッフ育成拠点としておいに期待されている。

【所感】

医療情報を専門とする立場から、ブータンの医療（特に辺地医療）に医療ITを役立てることが出来ればとの思いで、この訪問団に参加した。実際にブータンを訪れてみると、実地医療さえも十分に供給することが出来ない現実を目の当たりにすることとなった。基幹病院でさえ、十分な診断、治療機器が無く、専門医も不足していた。辺地ではなおさらの事である。ティンプー病院では、いわゆる電子カルテが導入されつつあるとのことであったが（インドのベンダー）、その実稼働状況を見学する機会には恵まれなかった。

また、国全体の通信インフラは、携帯電話は不釣り合いに発達しているものの、インターネット網は極端に整備が遅れている。高速通信網（光ファイバー幹線）は全国をカバーしておらず、国内はおろか、海外との通信も非常に遅い。ブータン国内で知り合ったBHUのスタッフとの連絡は、いわゆるインターネットチャネルではなく、電話網を通じたFace Bookなどがほとんどである。

ブータンなどでは、辺地と基幹病院を結んだビデオカンファレンスなどは、遠隔医療の手段として大変有用であると思われるが、これを支える通信インフラがまだ未整備である。また、基幹病院の電子化も緒に就いたばかりで、全ての面で医療ITは「これから」と言わざるを得ない。

（担当：吉原博幸）

【参考文献】

- 1) Statistical Yearbook of Bhutan 2012:
National Statistics Bureau, Royal
Government of Bhutan
- 2) Annual Health Bulletin 2012: Bhutan Health
Management Information System, Ministry of
Health, Royal Government of Bhutan,
Thimphu
- 3) Bhutanese Health System, A Summary
Overview: Policy and Planning Division,
Ministry of Health, Bhutan

4.2 高齢者の医療

【はじめに】

高齢になると、程度の大小はあるが誰にでも加齢にともなう何らかの健康不安が生じてくる。そこで高齢者医療では、感染症、高血圧、糖尿病といったような疾患自体も重要だが、それだけでなく高齢者がそれらの疾患をきっかけに、または加齢により、身体機能が低下したり、認知症・抑うつのような精神神経障害をきたすことを重要視する。つまり、そのような機能障害により自立した生活を送れなくなり、社会から脱落してしまわないように予防することが重要となるのだ。

ブータン王国の高齢化率は、現在およそ5%と言われ、わが国のおよそ25%に比べると、ずっと低い。しかし、民主化が進み急速に国が開かれつつあるブータンにとって、わが国における地域の過疎化と高齢化は、他人事ではない。即ち、近代化とともに若者の都会志向が進み、故郷の村を出てティンプーに出て行ってしまう人が増加しているのだ。ブータンの各地域の産業は農業・牧畜が主体であり、若者が村を出て行ってしまうとたちまちその産業の担い手が不足してしまう。ブータン保健省にとっても、いかにして若者に地域に残ってもらうか、地域を魅力あるものにするかということが課題のひとつとなっている。

【ブータンにおける高齢者医療】

ブータンにおける医療は、前節に述べられている通りであり、医療の最前線は各地域にあるBasic Health Unit (以下BHU)にゆだねられている。何らかの健康障害が生じるとまずBHUを受診し、そこから必要に応じて病院へ送られるというシステムである。BHUは日本のかかりつけ医的な存在であるが、医師が常駐しているBHUはあまり存在していない。多くのBHUには、その地域に多い疾患や母子保健のトレーニングを受けたHealth Assistant(以下HA)とBasic Health Worker という資格を持った看護師が常駐しており、薬の処方や簡単な医療処置を行っている。BHUは、山岳地帯も含め国の隅々にまで建設されており、ブータン国民の健康が向上していることが、平均余命の延長からも示唆される。それにともない、今後は高齢者医療もブータン医療のなかで重要になってくることが予想される。そこで現在、ブータン保健省と京都大学助教である坂本龍太医師が協力し、高齢者を地域で支えるためのプロジェクトの一環とし

て、各BHUスタッフに対する高齢者医療に関する教育プログラムが始まっている。

筆者もそのプロジェクトに参加し、2011年10月カリンBHU、2012年7月サムテガンBHUに滞在し、スタッフとともに地域に住む高齢者の健康調査をおこなった。カリンに関しては、坂本医師が長期滞在し地域在住65歳以上の高齢者ほぼすべての健康状態が把握されていたため、その際に問題の認められた住民を訪問して経過追跡をおこなった。

【カリンとサムテガンの地域的特性】

カリンは、ブータン東部に位置し、標高2000m強の農業・牧畜業・機織り業が産業の主体である。地域の人々はシャジョップ（東の人の言葉という意味）という、ゾンカ語（公用語）とは異なる言語を話している。首都ティンプーから車で2、3日かかる。

一方、サムテガンは、ティンプーから車でおよそ3時間のところに位置する。夏と冬の寒暖の差が少なく、気候的に穏やかで過ごしやすいという。産業は農業主体で牧畜業もおこなわれている。北部住民は冬虫夏草を採取して生計を立てている。サムテガンの住民は、比較的裕福なのか車を所持している人も多く、病気にかかるとワンデュ・ポダンやプナカ、時にはティンプーの病院にまで出かけて行くことも多い。また、若い人は都会に出てしまい、高齢者のみまたは高齢者と女性のみで暮らしている家も多い印象を受けた。

【地域で暮らす高齢者】

ブータンは、大家族で暮らし、家族のメンバーがそれぞれ役割を持って、互いに助け合いながら暮らしている。地域から都会に出ている人は実家に仕送りし、その兄弟が生まれ故郷で高齢になった両親・親戚と共に暮らしている。しかし、最近では若者の都会志向が強くなり、地域の過疎化が始まりつつある。カリン・サムテガンにも高齢者の独居世帯や、高齢者のみで住んでいる家が存在していた。

滞在中の印象では、カリンでは健診やBHU受診の際に、若者が高齢者を連れてくるが多かったが、サムテガンでは、高齢者のみがBHUに来ることがほとんどだった。サムテガンは地形的に平坦で歩きやすいことが理由の一つかもしれないが、高齢者は無視されていると嘆く人もあった。都会に近いところから近代化が進み、地域で支え合う考え方から個人主義的考え方へ変化してきているのかもしれない。

【高齢者の健康問題】

ブータン2地域を見てきて、高齢者に多い健康問題として、一つに高血圧があげられる。脳卒中を起こす人もあった。大量の塩分摂取が原因と考えられる。糖尿病はまだ少ないが、大量の炭水化物と少量の副食という食生活と、夜睡眠直前に食事をする生活習慣から増加しているようだ。現在保健省による糖尿病に関するプロジェクトが進行中であると聞く。ただ、しばらく滞在して感じたことには、食生活を変えるのは簡単ではないということである。自炊して現地の人と同様のエマダツィ（唐辛子のチーズ煮込み）やケワダツィ（じゃがいものチーズ煮込み、唐辛子入り）、蛋白質として干し魚（塩辛い）を食べていたが、どうしても塩分が増えてしまう。

また、日常生活機能を障害している大きな原因の一つとしては、痛みがあれば安静にするという習慣だ。カリンでもサムテガンでも、外傷後安静にしている寝たきりになった、膝が痛くてじっとしていたら歩けなくなった、腰痛がひどくなり歩けなくなった等の廃用性身体機能障害の人に出会った。カリンの骨折後寝たきりになった女性に、坂本医師たちが運動療法の重要性を伝えたところ、次の訪問時には杖をついて歩けるようになっていたということもあった。ブータンでは、年を取ると弱っていくことが当たり前であり、トレーニングすればある程度予防できるということはまだあまり知られていないようだ。また、高齢者の痛みは安静を要するものと要しないものがあるということとは認識されていないようだ。

【今後の展望】

これまで、地域のBHUスタッフは、母子保健や感染症対策を主体にトレーニングを受け、医療をおこなっていた。今後は地域に高齢者の割合が増加することが予想されるため、高齢になっても自立した生活ができることが新たに重要となってくる。

現在、ブータン各地では、各自の健康状態を把握するため、高齢者を対象とした健康診断プロジェクトが始まっている。しかし、とらえた健康問題をどのように評価し、どのような介入をしていけばいいのかということがもっとも重要であり、まだ道は始まったばかりである。今後我が国でのノウハウをいかしながら現地医療スタッフと協力し、ブータン高齢者の健康にかかわっていく所存である。（担当：藤澤道子）

4.3 新生児医療、母子保健、予防接種

【はじめに】

ブータンは2008年に制定されたブータン王国憲法第9条に「国により、現代及び伝統双方の医療上において、公共医療のための基本施設の無償利用が提供されなければならない。」[1]と明言されているように医療費は基本的に無料である。ここでは私の専門である母子保健と新生児医療について文献資料やウェブサイトの情報、当該地での見聞も踏まえて論考する。

【母子保健事業】

1960年代に医療の近代化が始まり、健康指標の改善を目指してまず力を注がれたのが母子保健事業である。ブータンではそれまでは助産師などの専門職者が立ち会わない自宅分娩が主流であり、1950-55年の乳児死亡率は1000出生対184.8であり、平均寿命は36.1歳だった[2]。Basic Health Unit(BHU)や病院などでの施設分娩件数の増加、出生直後から始まる予防接種、栄養・衛生状態の改善により、2005-10年の乳児死亡率は1000出生対44.4、平均寿命は65.8歳にまで改善した。予防接種啓発ポスターによると、出生後すぐからBCG、経口ポリオ生ワクチン、B型肝炎を開始し、その後、ジフテリア、破傷風、百日咳、インフルエンザ桿菌、麻疹、風疹、ヒトパピローマウイルスが無償で提供されている(写真7)。狂犬病に関してはワクチンが不足しており感染動物と接触しないよう注意喚起のポスターが掲示されていた。

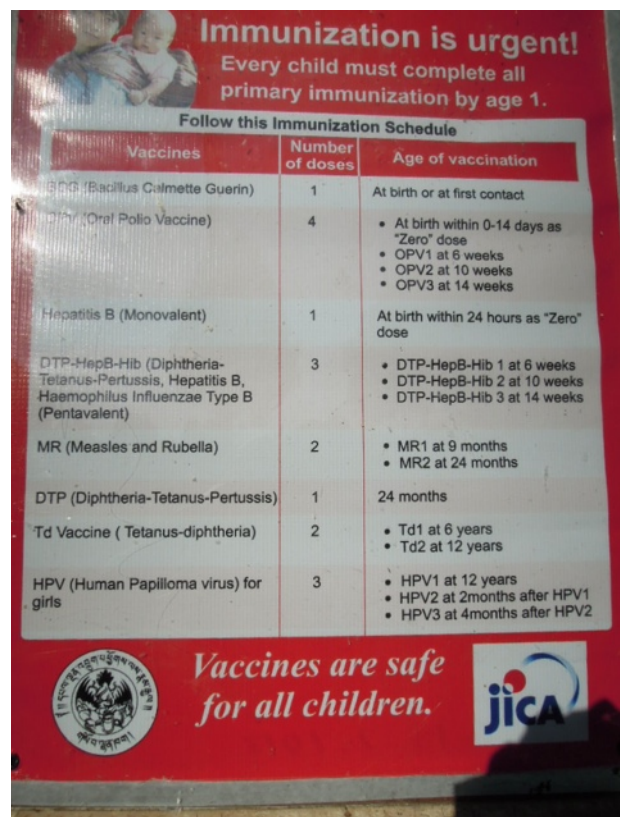
また、母子の健康と福祉の増進を目的として、家族計画が推進されており(写真8)、その結果、合計特殊出生率は6.67から2.61と女性1人が出産する子供の数は約1/3まで低下していた。

【母乳育児】

筆者は母乳育児支援に関心があり、Jigme Dorji Wanchuck National Referral Hospital(JDWNRH)やBHU見学時、母乳育児を訴えるポスターや写真が目についた(写真9)。

街で売られている粉ミルクも「母乳代用品のマーケティングに関する国際基準(以下国際基準と略す)」[3]を遵守したものだった。日本も国際基準を承認しているが、実際には多くの母乳代用品や販売促進事業が国際基準に違反している。ブータンで国際基準が遵守されている背景として重要なことは、安全な水の確保は80%にとどまり[4]、どこでも安全な水が手に入るとは限らないということである。

ある。そのため日本で本来は不適切な行為ではあるが多くの施設で行われている糖水の補足は基本的に行われていない[5]。実際、地方や移動中、屋外の黒い大きなタンクに雨水を貯水している光景を目にし、また現地の人々でも生水は飲まないという。水とトイレの衛生管理は保健省の公衆衛生の課題の一つにも挙げられており[6]、サムテガンのキャンプ地の民家のトイレは地面に穴を掘って板を張り板とトタンで壁と屋根をつけたものだった。これは田舎では一般的な様式のようなのである。このような衛生環境であるため、母乳育児は乳児死亡率を下げる最善の策であり、乳幼児と経産婦の健康を守るうえでも重要な栄養法といえる。



Vaccines	Number of doses	Age of vaccination
BCG (Bacillus Calmette Guérin)	1	At birth or at first contact
Polio (Oral Polio Vaccine)	4	<ul style="list-style-type: none"> At birth within 0-14 days as "Zero" dose OPV1 at 6 weeks OPV2 at 10 weeks OPV3 at 14 weeks
Hepatitis B (Monovalent)	1	At birth within 24 hours as "Zero" dose
DTP-HepB-Hib (Diphtheria-Tetanus-Pertussis, Hepatitis B, Haemophilus Influenzae Type B (Pentavalent))	3	<ul style="list-style-type: none"> DTP-HepB-Hib 1 at 6 weeks DTP-HepB-Hib 2 at 10 weeks DTP-HepB-Hib 3 at 14 weeks
MR (Measles and Rubella)	2	<ul style="list-style-type: none"> MR1 at 9 months MR2 at 24 months
DTP (Diphtheria-Tetanus-Pertussis)	1	24 months
Td Vaccine (Tetanus-diphtheria)	2	<ul style="list-style-type: none"> Td1 at 6 years Td2 at 12 years
HPV (Human Papilloma virus) for girls	3	<ul style="list-style-type: none"> HPV1 at 12 years HPV2 at 2 months after HPV1 HPV3 at 4 months after HPV2

Vaccines are safe for all children.

JICA

写真7：BHUの予防接種啓発ポスター。ワクチンの種類と接種時期がまとめられている。

FAMILY PLANNING ACCEPTOR							
METHODS	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
ORAL PILLS	11	131	122	87	242		
CONDOM	115	228	184	115	185		
COPPER 'T'	11	08	09	12	07		
DMPA INJ.	49	294	346	439	512		
VASECTOMY	10	56	13	73	17		
TUBECTOMY	17	25	25	29	110		
C.P.R	20%	68%	67%	68%	91%		

写真8：BHUに貼ってあった避妊の統計。
年間の件数と推測出来る。



写真9：各地のBHUに飾られていた授乳婦の写真

2010年のUNICEFと保健省の合同調査[7]では、何らかの形で少しでも母乳で育てられたことのある児が全体の98.9%を占める一方で0-5か月児の完全母乳率は48.7%、6か月未満の混合栄養(母乳優位)は66.8%であった。完全母乳率は都市部の方が地方より高く(57.4%対44.5%)、母親の学歴が高いほど高く(教育歴なし44.4%、2次教育57.3%)、富裕層の方が貧困層よりも高い(貧困層36.1%、富裕層65.0%)傾向があった。その一方で瓶哺乳は都市部の(都市部18.4%、地方8.5%)高学歴(教育歴なし7.4%、2次教育21.3%)で裕福な家庭(貧困層4.7%、富裕層23.2%)ほど割合が高かった。これらの理由

については言及されていないが、地方の慣習や哺乳瓶への誤った認識が影響しているのかもしれないと西澤氏は推察している[8]。サムテガンのhealth assistant (HA) の話では、今後、産後休暇が現在の3か月から6か月に延長されるとのことだった。この政策によりWHOの「乳幼児の栄養に関する世界的な運動戦略」の中の「生後6か月間は母乳だけで育てる」ことが容易になり、完全母乳率が上昇し母子の健康状態が向上することが期待される。

【新生児医療とfamily centered care】

1960年代の医療の近代化当初、小児医療は主にインドからの招聘外国人医師・医療従事者によって提供されていた。2012年1月現在、8人の小児科医が診療に従事し、そのうち4名がJDWNRHに所属し、残りの4名は基幹病院に1名ずつ所属している[9]。ブータン国内の年間の出生数は15,000人(2005-10年)2)であり、施設分娩率は69.5%、JDWNRHの分娩件数は3500件に達するという。独立した新生児集中治療室(NICU)は全国でJDWNRH1か所のみであり、年間の入院数は約1000人、その半数は新生児黄疸の治療である。ブータン人も日本人同様新生児黄疸になりやすい(新生児黄疸の頻度は人種差があり東アジアの民族は多いがヨーロッパ系の民族では少ない)。地方の病院やBHUには血清ビリルビン測定器や経皮ビリルビン測定器がないため視診による診断に頼っており、退院前の親に新生児黄疸の見分け方を教えているということである[10]。実際サムテガンのBHUにも生後20日くらいの新生児を連れた家族がやってきて黄疸について相談され、筆者も掌を診て重症の黄疸か否かを判断せざるを得なかった。

JDWNRHの新生児病棟は全部で25床あり、そのうち集中治療を要する児のためのNICUは5床である。25床に看護師の定数は12名であり、24時間手厚い看護を実施するのは至難の業で、児の状態が落ち着いている場合は、授乳やオムツ交換、清拭などは、すべて付き添いの両親の役目となっている(10)。交通や地理的な事情で家族は面会に通うことが難しいこともあり、病棟内に設けられた入院時の母親のためのベッドに泊まり込み、必然的に両親が医療に参加し、家族中心の医療となっている。このような家族中心の医療をfamily centered care(家族中心型の医療)と呼び、北欧から世界に広まってきている。今まで家族から赤ちゃんを切り離してきたことが親子関係の形成、母乳育児、児の発達といったことに悪影響を及ぼしてきたとい

う反省から日本でも注目され広まりつつある。

「母子分離が当たり前」でないブータンの新生児病棟は、文化的に親戚・家族の絆が強いブータン人にうまく受け入れられ、結果的に「母子分離が当たり前」の日本で変えることが難しいfamily centered careを実現できているように感じた。

（担当：道と百合）

【所感】

サムテガンのBHUで数名の新生児を診察させていただいた。その際1日何回くらい母乳を与えているか尋ねたところ、「数えたことがないからわからない。何度となく授乳している」という答えが返ってきた。日本では直接授乳であれ瓶哺乳であれ、何回授乳しているか聞けば必ず答えが返ってくる。赤ちゃんを常におんぶし母と子がずっと一緒にいて1日何回飲んだか数えることなく児のほしがる時にほしがるだけ授乳する、そんな姿に目から鱗が落ちた気がした。ブータンの医療は物的資源、人的資源ともに不足しているが、足りない中であるものを最大限に生かす努力によって出産直後の母児同室や母乳育児、NICUでのfamily centered careが実践されていると感じた。またこれらを背景から支えているのは国民総幸福の柱のひとつである「よい統治」を行う政府と国民から篤い信頼を集めている国王であるように感じ、羨ましくも感じた。今後もなんらかの形でブータンの赤ちゃんとその家族の幸せに関わることができれば本望である。

今回、このような貴重な体験の機会を与えて下さった京大ブータン友好プログラムの先生方・スタッフの方々、そして不在の間、病棟の赤ちゃんたちを診て下さった京大NICUのスタッフの先生方・看護師さん達に心よりお礼を申し上げます。

（担当：道と百合）

【参考文献】

- 1) The constitution on the Kingdom of Bhutan, World Intellectual Property Organization. http://www.wipo.int/wipolex/en/text.jsp?file_id=167955 (2013年4月18日検索)
- 2) United Nations, Department of Economic and Social Affairs. Population Division, Population Estimates and Projection Section. <http://esa.un.org/unpd/wpp/unpp/p2k0data.asp> (2013年4月28日検索)
- 3) Annelies Allain, Andy Chelty著、円谷公美恵、本郷寛子ら翻訳、乳児の健康を守るためにWHO「国際基準」実践ガイドブック 保険従事者のための「母乳代用品のマーケティングに関する国際基準」入門、日本ラクテーションコンサルタント協会、2007.
- 4) WHO Bhutan Health Information Water & Sanitation. WHO Country of Bhutan. http://www.whobhutan.org/en/Section4_26.htm (2013年4月18日検索)
- 5) Dolma, 幸せの国?ブータン. <http://ameblo.jp/dolma/> (2013年4月13日検索)
- 6) Public health engineering Division, Department of public health, Ministry of health. <http://www.health.gov.bt/> (2013年4月15日検索)
- 7) Bhutan Multiple Indicator Survey 2010. National Statistics Bureau, UNICEF and UNFPA (2011) <http://aidsdatahub.org/en/reference-librarycols2/item/23816-bhutan-multiple-indicatorsurvey-2010-national-statistics-bureau-unicef-and-unfpa-2011> (2013年5月7日検索)
- 8) 西澤和子. 新生児科医師, 雷龍の国へ 幸せの国ブータンで赤ちゃんとともに生きる. Neonatal Care.25:620-621:2012
- 9) 西澤和子. ブータン王国における新生児医療の現状と課題-重症新生児3例の治療経験を通して-, ヒマラヤ学誌, 13:254-266:2012
- 10) 西澤和子. 新生児科医師, 雷龍の国へ 幸せの国ブータンで赤ちゃんとともに生きる. Neonatal Care.25:850-851:2012

4.5 小児外科、一般外科

【一般外科】

ブータンでの一般の医療の入り口はBasic Health Unit (BHU)である。日本ではいわゆる診療所に相当するが、基本的に医師が在駐しない。あるBHUにおける受診疾患の上位10は以下の通りである。

1. 感冒（風邪） 2. 神経障害、四肢の運動障害
3. 皮膚の感染症 4. 下痢と赤痢 5. 胃潰瘍症候群 6. 筋肉、骨の障害 7. その他の消化器疾患 8. 目の障害 9. 作業に伴う傷害（切り傷、擦り傷等） 10. 高血圧 である。この中で外科関連疾患は2、5、6、9である。

私がサムテガンで経験した患者の一人を提示する。60代女性。主訴は膝の痛みおよび膝の可動域制限による歩行障害である。サムテガンBHUから悪路を車で30分、そこからさらに山道を15分程歩いたところに住んでいた。膝の痛みに対して以前needle therapyを受けたがあまり効果がなかったという事であった。Needle therapyとは、日本という針治療ではなく、先が鈍になっている針をアルコールランプで暖め、皮膚に数カ所当てるという治療で、お灸に近い。その後も痛みが有るため家からほとんど出ず生活していたということである。訪問時には、脚を90度に曲げて体の前においた状態、いわゆる体育座りの状態で生活していた。ある程度の屈曲、伸展は可能であるが、完全に伸展する事は出来ず、歩行は不可能であった。痛みのために膝を動かさず同じ姿勢でいたために膝関節の拘縮を来していた。治療はリハビリであり、日本ではリハビリセンターに通院してと言う事になるが、BHUにはそのような機能はなく、自宅でリハビリを頑張ってもらうしか無い。また、リハビリ医の往診も、依頼して今月来れるかどうか、来月、再来月になるかもしれない、という感じである。

しかし、重要なのはブータンでは家族の介助が十分に有り、おそらく本人はそこまで不自由を感じていないという事である。日本であればいくら良い手術を受けてリハビリで回復しても、以前より生活が不自由だ、こういう事が出来なくなった、という不満の声が多く聞かれる。また、欧米ではこんな投薬、手術が出来るのに日本では出来ない等日本で出来る治療に対する不満の声も聞かれる。しかし、ブータンではそこで受けられる治療、家族のサポートで満足し幸せに生活しているのである。このあたりが国民総幸福度に貢献していると考えられる。

9.作業中の傷害であるが、サムテガンBHUでは縫合の道具も無く、抗生剤もペニシリンのみという状況である。BHU見学の際に来院した老人で、左下腿に15cm程の切創後の癒痕を認めた患者がいた。傷について尋ねた所、昔農耕具で足を切ったが自然に治った、と言っていた。現代の日本では、明らかに縫合不要である小さな傷でも病院を受診する人を多数認めるが、ブータンでは昔の日本のように、“つばを付ければ治る”的な感覚の人が未だ多いのではないだろうか。

その他外科に関係する病気としては胃潰瘍の人数が比較的多い事である。先進国に比べ発展途上国ではピロリ菌の感染率が高いことが報告されており、ブータンにおけるピロリ菌の感染率は正確にはわからないが、診療所のデータを見る限りでは感染率は相当高いと考えられる。

最も我々が驚かされたのは避妊方法である。コンドームは基本でBHUにて配布されていたが、外科的アプローチによる避妊がコンドームとほぼ同等に扱われていた。外科的避妊というのは、女性では卵管結紮術、男性では精管結紮術である。手術を受けた年齢や子供の有無等は不明であるが、約4000人の村で卵管結紮術は年間約40例、精管結紮術は約100例施行されていた。日本では、外科的アプローチは保健適応になっていないこともありあまり一般的ではない。男性の精管結紮術は一般的にパイプカットと言われており、精管が体表に近いところを走っているため、局所麻酔、半身麻酔で施行され、比較的低侵襲で施行可能である。しかし、女性の卵管結紮術は卵管が腹腔内に存在し、開腹手術が必要となるため、侵襲が男性に比べると大きくなってしまふ。開腹でなく、腔からのアプローチもあるが、開腹と比べると難易度も高い。ブータンでどちらが施行されているかは私が調べた限りでは不明であるが、おそらく開腹手術と思われる。国の政策として人口のコントロールが行われており、また、医療費は全て国の負担であるため外科的な避妊が積極的に施行可能なのであろう。

【小児外科】

小児外科というと子供の外科、という漠然としたイメージはあるものの、具体的にどういう病気を治療しているかという答えられる人は少ないのではないだろうか。鼠径ヘルニア（脱腸）、陰嚢水腫、臍ヘルニア（でべそ）が代表的な疾患で、これらで小児外科の手術症例の約半数を占める。それ以外に小児外科で扱う疾患として停留精巣、鎖

肛、Hirschsprung病、リンパ管腫、胆道閉鎖症、胆道拡張症、膀胱尿道逆流症等が有る。また、新生児期に手術が必要な疾患として食道閉鎖症、十二指腸閉鎖症、小腸閉鎖症、腹壁破裂、横隔膜ヘルニア等がある。基本的には先天的な異常により起こる疾患が大多数である。その他悪性新生物（神経芽腫、肝芽種、腎芽腫等）も認めるが、成人の悪性新生物（胃癌、大腸癌、肺癌、乳癌等）と比較すると数は非常に少ない。

ブータンの年間出生数は人口70万人に対して約14000であり、日本の2〜3倍の出生率である（人口1億2千万に対し出生約100万、島根県が人口約70万人でほぼ同じであるが、出生は約7000）。島根県で施行されている小児外科手術は約400例あり、単純に計算すると倍の800例が年間手術を必要としている。小児外科疾患は患者がいきなり小児外科を受診するのではなく、まずは小児科を受診し、小児科医が疑わしい患者を小児外科医に紹介し、小児外科医が治療するという形態をとる。このため、小児外科の充実のためには小児外科医が多くいる必要はなく、小児科の充実、レベルアップがまず必須である。ブータン国内に小児外科医は2人、小児科医が8人と絶対的な数が不足している。小児外科の充実のためには小児外科医の補充も重要だが、小児科医の補充がより急務である。ブータンにおける患者搬送の問題もある。112で救急車を呼ぶ事はできるが、我々が訪れたサムテガンでは救急車を呼べるようになったのは昨年である。高山の中にある国でトンネルはなく、道路はたいがい曲がりくねっている。メインの道路は舗装されており、搬送には問題ない。しかし、メインの道路から少し外れるとほとんどが未舗装の道路となり、bumpyであるため救急車で何か治療を行うのはまず不可能と思われる。また、未舗装の道路は雨期になるとぬかるんで車通れなくなり、患者搬送は不可能となる。更に奥地に行くと車も入れなくなり、家に辿り着くには獣道のような細い道を数時間、下手したら数日歩かねばならない所もまだまだ沢山ある。医療そのものの以外にも課題は山積みである。

【所感】

以上私がブータンで経験した医療を日本と比較し述べてきた。ブータンの医療水準は低く、日本の医療と比べべくも無いが、医療水準に比例して患者の満足度が低いか、といわれるとそうではない。その最たる理由は医療を受ける側の姿勢が異なるからである。日本では医療は享受できて当然

のもの、そして病院に行けば病気は治って当然のものとこの感覚の人が非常に多いが、ブータンでは診療を受ける事に感謝の気持ちが有り、症状が改善すればなおさらのことである。このため、日本ではどんなに医療が発展して様々な病気が治るようになって人々の満足度、幸福度が上昇する事は無く、ブータンでは最先端の治療を受けることができなくても、症状の改善が認められれば満足度、幸福度は上昇するのである。これは医療に限った事ではなく、生活全般に通じる事である。無論様々な欲求、欲望を解決する事により文明が発展してきたのは事実であるが、文明の発展だけでは人間は満たされないという事をブータンを訪問して実感した。文明の発展を否定するつもりではなく、現代の我々がより幸せに暮らすためには文明の発展により享受している様々な事に対してより感謝の気持ちを持つ事が必要なのではないだろうか。

このような素晴らしい機会を与えて下さった京大ブータン友好プログラムの皆様に感謝の意を評します。また、ブータンで10日間共に過ごした第10次ブータン隊の皆様、ガイドのSonamさん、ドライバーのDorjiさん、本当に貴重な経験をさせて頂き有り難うございました。

（担当：平田義弘）

5. 教育 - 医学を例とした教育プロセスの観点から

2013年1月18日より29日迄、筆者は、京都大学ブータン友好プログラム第10次訪問団の一員としてブータンを訪れた。本訪問の少なからぬ意義は、ブータン王立大学（Royal University of Bhutan）にブータンで初の医学部が設置されるにあたり、本学との交流を目的とし、保健省及びティンブー王立病院の幹部と京都大学訪問団との会合が開かれたことにあるであろう。本会合では、ブータン保健省の方からブータンの医療の現状報告、また、本学医学部附属病院・医療情報企画部の吉原教授による医療情報システムについての報告があった（写真10）。



写真10：保健省との会合於ティンブー

ブータン保健省によると、現時点でのブータンの医師数は181名、内専門医expatsが35名、およそ72万人の人口で10,000人に対して医師が僅か2.6名という医師不足が指摘され、医師の養成は喫急の課題であるとの印象を受けた。医学教育に関しては、ブータンは現在、インドやスリランカの大学の医学部で学んだ医師が帰国して医療を行っている。今回の医学部設置にあたり、伝統医学と近代医学が融合された形で、ブータン独自の医学教育体制の構築が期待されている。ところで、医学教育は、専門教育として高等教育に位置付けられるものであるが、高等教育機関を設置するにあたっては、初等、中等を含む教育プロセスの包括的な検討が不可欠であると筆者は考える。そこで本稿は、ブータンの教育に関心を置き、本邦での先行研究を考察する。そのうえで、初・中・高等教育ならびに専門教育という教育プロセスの観点から、

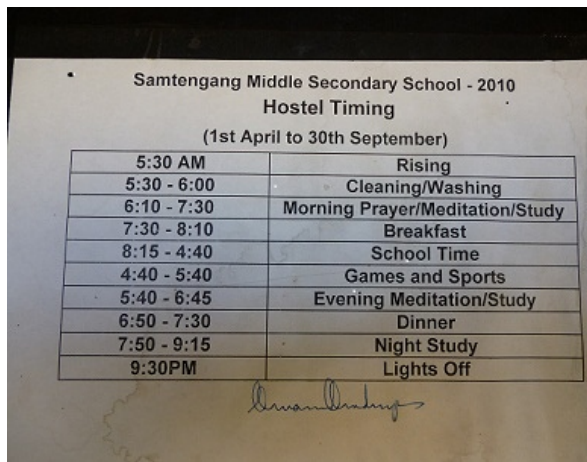
ブータンの教育の特徴及び問題点を俯瞰的に捉え直したい。

ブータンの教育の先行研究として、平山（2009、2012）、杉本（2013）を挙げる。平山（2009）によると、ブータンの教育の近代化は、インドによる財政面、政策面での大きな支援を受けて、1961年の第1次5カ年計画に始まった。その後1987年には、初等教育の普及の為に遠隔地にコミュニティスクールが設置される。それと同時に、理科、社会、道徳等の内容を包含した「環境教育」と呼ばれるNAPEプログラム（New Approach to Primary Education）が導入される。2002年に教育制度が改編され、現在は1-6-2-2-2制をとっている。第6学年までの小学校Primary School、第8学年までの小中学校（Lower Secondary School）、第10学年までの中学校（Middle Secondary School）、第12学年までの高校（Higher Secondary School）である。1961年の第1次五カ年計画当初0.2%であった初等教育就学率は、87.4%（2009年）（参考情報1）にまで向上した。一方で平山（2009）は、ブータンの初等教育達成の目標には統一感が欠如していると問題点を指摘している。また、平山をはじめブータンの教育制度に関する先行研究の多くは、主に初等教育政策について論じており、中等・高等教育の研究、或いは僧院教育等ブータンの伝統的な教育機関に関する研究は豊富とはいえない。実際、初等教育の就学率は向上している一方で、やや古いデータではあるが、初・中・高等教育の純就学率は、33%（2001年）と低い水準になっている（参考情報2）。

次に、杉本（2013）は、ブータンの教育内容の研究を行っている。ブータンの国家政策の大きな特徴は、経済発展による物質的な豊かさではなく、精神的な豊かさを追求する「国民総幸福論GNH（Gross National Happiness）」を掲げる開発計画である。GNHは、公正で持続可能な社会経済発展、環境保全、文化遺産の保存と促進、優れた統治を柱とし、実務委員会における審議を通して、その理念を政治、経済、社会に浸透させることを図るものである。なかでも教育は、GNHを実現する具体策として位置付けられ、国家の幸福を構成する重要なファクターとして捉えられている。

（杉本、2013）杉本は、GNHにおける教育の役割について言及し、「幸福度」調査を行っている。

ブータンでは授業科目、生活面のすべての学校生活の側面において、幸福の理念が追求され、それは主に仏教の概念に見いだされるという。「価値教育」は、1999年に初等教育に導入され、週1時間の授業で愛情、思慮、尊敬、友好等、学年ごとに徳目が設定された。（平山、2009）筆者が訪れたサムテガンにある中学校の寮のカリキュラムには、Meditation（瞑想）と記載されていた（写真11、12）。



5:30 AM	Rising
5:30 - 6:00	Cleaning/Washing
6:10 - 7:30	Morning Prayer/Meditation/Study
7:30 - 8:10	Breakfast
8:15 - 4:40	School Time
4:40 - 5:40	Games and Sports
5:40 - 6:45	Evening Meditation/Study
6:50 - 7:30	Dinner
7:50 - 9:15	Night Study
9:30 PM	Lights Off

写真11：サムテガンの中学校の女子寮の日課表



写真12：サムテガンの中学校

これからは、中等教育の寮生活においても仏教教育が施されていることがうかがえる。一方で杉本は、近代教育の発展が若者の幸福に結びつくという点においては、その調査から、疑問符を投げている。若者の幸福感は、伝統的な僧院での教育観に裏付けされたといえる。しかし、教育の近代化、国際化は、それに社会構造が追いついていない現状において、高学歴の卒業生の失業を生み、若者に挫折感を与えることになるという。（杉本、2013）

以上の先行研究の考察より、ブータンの教育の問題点がうかがえる。それは、ブータンの教育政策において、中等教育以降の教育、あるいは、初等教育から高等教育までの教育の課題を見通したビジョンが不十分であることといえよう。また、僧院教育等の伝統教育、あるいは、例えば農業や工業などの近代的な職業教育の現状、また教育制度におけるそれらの位置づけが明確とはいえない。確かに、開発途上国のブータンにとって、初等教育の完全普及は、基礎的な課題である。しかし、初等教育の就学率が100%に近づく今日、中等教育、高等教育の体制整備は必須である。また、他の開発途上国と異なり、「環境教育」、「価値教育」等、仏教思想に基づく独自の教育理念を掲げ、先進諸国からもその政策において一目を置かれるブータンにとって、その理念を初等教育の後の教育に有効に生かすことが、大いに期待されるであろう。杉本の調査の、高学歴になるにつれ幸福度が下がるという研究は印象深い。「幸福度」の基本にある仏教の価値教育は、根本的な人格形成に寄与する初等・中等教育とは親和性を持ち得るが、高度な知識や技術の習得を目的とした高等教育に「幸福度」は結びつき難いであろうか。初等教育の普及の達成には、中等・高等教育、さらにその後の社会への接続を見据えることが不可欠である。特に本訪問の主な課題であった医学教育といった専門教育、あるいは職業教育において、「幸福」の追求はどのように捉えられるであろうか。今日、ブータンの教育には、高等教育、そして、専門教育の普及と充実こそ求められているのではないか。例として、本稿の関心である医学教育という側面から、専門教育の様相を以下で検討したい。高等教育を受けた者の社会での活躍の場を考慮した教育体制の整備は、公正で持続可能な社会経済の発展というGNHの理念に繋がるものである。そのためには、伝統的な生活と地域の多様性を認め、たうえて、教育と産業、すなわち教育機関の卒業生と就業人口を構造的に捉えた政策を実施し、職業意識を高め技能を伝達するキャリア教育を普及させる必要がある。さらに、より高度な専門教育にあたっては、組織は細分化されるであろう。例えば、近代的な医学教育にあたっては、医療を中心としたブータンの福祉社会全体を捉えなければならない。医療には、医師だけでなく看護師、薬剤師、放射線技師等、医療職の包括的な養成が不可

欠である。本訪問では、サムテガンを中心に BHU（Basic Healthcare Unit）とよばれる各地域の診療所を訪ね、ブータンの医療システムについて知見を深めた。BHUには、ヘルス・アシスタント（Health Assistant）が配置され、初期診療にあたる。（写真13）



写真13：サムテガンのBHU

近代的な医療により精通した優秀なヘルス・アシスタントの養成と増員も必須であろう。このような、医師と医療職の養成の先にある、医療・福祉分野での就業環境の充実、大学での医学教育の実施と同時に政策として整備される必要があるであろう。

以上、本訪問で得られた知見により、ブータンの教育に関する先行研究を鑑み、医学という専門教育を中心に、教育プロセスという観点から、ブータンの教育を考察した。初等教育の達成は、開発途上国であるブータンにとって、基礎的な課題であることには間違いない。

しかし、GNHという画期的な開発概念は、中等・高等教育、職業教育、専門教育という一貫した教育プロセスのなかで、さらには卒業生の受け皿である就業環境を充実させることにより、その意義を増すのではないかと考える。確かにブータンの産業の近代化が教育の発展に追いついていない現在、高等教育までの一貫した教育政策の実現は容易なことではない。しかし、近代的教育の発展と伝統的価値を尊重する「幸福」が矛盾なく実現されるためには、社会と接続した教育のあり方を模索し、高等教育及び、専門教育の成果をより具体的な形で社会に還元させることであろう。今回のブータンで初めてのブータン王立大学の「医学部」の設置が、医療・福祉分野での就業環境の充実につながり、その一つの布石になることを期待する。（担当：小野加奈子）

【参考文献・参考情報】

- 1) 参考情報1：外務省 政府開発援助ODA 国別・地域別政策情報, http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/kuni/06_databook/pdfs/02-06.pdf
- 2) 参考情報2：外務省 政府開発援助（ODA）国別データブック 2006, http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/kuni/06_databook/index.html#II
- 3) 杉本均（2013）「ブータンの子どもたちの『幸福度』と教育」（教育と医学の会『教育と医学』第61巻1号）pp.12-19
- 4) 平山雄大（2009）「ブータンにおける近代学校教育の特質とその課題（早稲田大学教育学会『早稲田大学教育学会紀要』）」pp.132-139
- 5) 平山雄大（2012）「日本におけるブータン教育研究の現状と課題 ―先行研究三類型―」（早稲田大学教育学会『早稲田大学教育学会紀要』第13号）pp.135-142

6. ブータンの宗教

- チベット仏教が紡ぎだす絆とつながりの死生観 -

【はじめに】

ブータンは仏教国である。子供でさえも、生まれてきた目的は執着を捨て、涅槃に入ることであると、躊躇なく答える。テレビで、そんなドキュメンタリーを見て驚いた。同じ仏教国でも日本とは随分違うようだ。本論では僧籍を持つ筆者が、仏教徒としての視点で、ブータンの宗教について報告する。

【背景と概要】

ブータン人が信仰しているのは、チベットから渡来した密教である。2500年前にインドで釈迦牟尼仏によって確立された仏教がチベットへ伝わり、土着文化と融合し変化をとげ、さらにブータンに流れて定着した。チベットは1959年より中国の支配下に置かれ、統治者であったダライ・ラマ十四世がインドのダラムサラに亡命しているため、唯一ブータンだけが、仏教を国教とする独立国家として存在している。

チベット研究家で、かつてブータン王立図書館の顧問であった今枝由郎氏が著した「ブータン—変貌するヒマラヤの仏教王国」によると、19世紀までのブータンの歴史は、即仏教の歴史だという。ブータンに仏教を伝えたのはチベット僧であり、チベット文化圏に仏教が最初に伝わったのは、ソンチェン・ガンポ王が国家を統一して、古代チベット王国を建国した7世紀前半のことである。8世紀後半、チベットのチソン・デツェン王が仏教を国教と定め、インドで密教の修業をしたパドマサンバヴァ（蓮の中から生まれた人という意味）を迎えたことによって、チベットに密教が一気に広まった。このパドマサンバヴァによってチベットに伝えられた密教は、ヒンドウ教との融合が進み、タントラの特色が強い、インドの後期大乘仏教の流れを引くものであった。タントラとはヒンドウ教の秘儀聖典のことであり、インド後期密教のタントラとは、古代インド人の民間信仰、占星術、巫術、祭式、医学、薬学、天文学、錬金術を包括している。インドから受けついだチベット仏教は、このようなタントラの特徴の濃いものであった。チベットの土着の信仰で、アニミズム、シャーマニズムのボン教と習合し、民衆の間で仏教が

広く受け入れられるようになっていった。ブータンの民家の壁などに描かれているポーと呼ばれる男根の絵には、子宝に恵まれたり、魔除けの力があるというが、8世紀後半以降のブータンでは、このような土着の信仰と融合しながら、チベット仏教がゆるやかに民衆に浸透していったようだ。

十一世紀前半に、チベット仏教の、カーギュ派の一派、ドウック派の高僧、ンガワン・ナムゲルはチベット王との関係が悪化したためブータンに亡命し、彼を迎えたブータンのドウック派は国内を統一した。二十世紀初頭に世襲王政が打ち立てられるまで、ドウック派の政教一体制国家としてのブータンが確立され、国の最高権威者として、ンガワン・ナムゲルの生まれ変わりが、歴代就任していた。その一方で、八世紀にパドマサンバヴァによって始められたニンマ派の僧たちもブータンで布教し、多くの寺院を建立した。ブータンではニンマ派は古派、それ以降に興った宗派は新派と呼ばれている。ブータン人の国教はドウック派であるが、信者数が一番多いのはパドマサンバヴァによって伝えられたニンマ派である。開祖、パドマサンバヴァはグル・リンポチェとも呼ばれ、ブータンの寺院や民家のほとんどの祭壇で、その像が信奉されている。ちなみに、「グル」は師や先生、「リンポチェ」とは尊いもの、宝、という意味だという。

同じく、祭壇や画像でよくみかけるのが、グレーの長いあごひげが特徴のシャプドウン・リンポチェだ。シャプドウンは、ブータンに亡命してきたドウック派のンガワン・ナムゲルの称号である。この他、ブータン仏教では、様々な神仏が寺院に祀られ、崇められている。日本でもお馴染みなのは、シャキヤムニ（釈迦牟尼仏）、アヴァロキテシュヴァラ（観音菩薩）マンジュシュリ（文殊菩薩）アチャラナータ（不動明王）等であるが、ターラと呼ばれる女神も篤く信仰されている。ターラは観音菩薩の涙から生まれたといわれるが、チベットのソンチェン・ガンポ王の二人の妃を象徴しているともいわれている。全身緑色のグリーンターラはネパール人の妃を、全身白色のホワイトターラは中国人の妃を表しているという。さらに、11、2世紀に現れたというミラレパというチベット密教行者も祀られている。父親の遺産を横領した叔父一家を黒魔術で亡ぼし、それを悔いてカーギュ派に弟子入りしたという。数多くの詩を残し、

苦行詩人とも称されている。その他、性的エクスタシーを悟りの境地に高めるという思想を具体化したという、男女の仏が合体した姿の歡喜仏、獣の顔や、恐ろしい形相をした忿怒仏など、タントラの影響を受けた極彩色のマンドラが寺院や民家の祭壇で信奉されている。

チベット仏教の特徴として忘れてはならないのが、チベットとブータンで深く信じられ、崇められている活仏、あるいは化身と呼ばれる存在である。化身とは、生まれ変わりを繰り返して、悩み苦しむ人々を悟りへと導く高僧である。化身の中で、最も有名なのが観音菩薩の化身とされ、現在十四回目の転生をしているダライ・ラマであろう。ブータンにも現在、化身として認められている高僧が百人あまりいるという。輪廻転生思想は、チベット仏教において、非常に重要である。仏教では、「六道輪廻」の思想があり、地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天上の六つの世界を、生前の行いに応じて生まれ変わると信じられている（写真14）。



写真14：プナカゾンの六道輪廻マンドラ

この六つの迷いの世界から解脱しない限りは、輪廻のサイクルから抜け出すことができず、悟りを開き、仏になることによって、この苦しみから離れられる。その方法を説くのが仏教である。化身の場合は、解脱することができるにも関わらず、この世

の人々を見捨てることができず、あえて輪廻を繰り返すため、一般の人間とは違う次元の世界から生まれ出るのである。化身はブータンでも篤い信仰を集めており、法要の際には、多数のブータン人が、教えを聴きに寺院に集まる。普段は最新ファッションに夢中なブータンの現代っ子さえも、まるでロックコンサートに出かけるように熱狂して、化身の法要に参加するという話からも、ブータン人にとっての化身への崇拝ぶりがうかがえるというものだ。

【京都大学第10次ブータン訪問団として体感したブータン仏教】

ブータンは仏教が生きている国である。葬式仏教とも揶揄される現代の日本と違い、仏教の教えが人々の心に染みつき、日常生活に実践されている。ブータンには、あちこちに野犬がいる。私たちのグループが滞在したサムテガンキャンプ場でも、数十匹の野犬がうろついていた。噛まれると狂犬病にかかる恐れがあるというので、最初は敬遠していたのだが、現地のガイドさんたちがエサを与えているので、人懐っこく、お行儀が良かった（写真15）。



写真15：サムテガンキャンプ

このキャンプ地だけでなく、ブータンのいたる所で同じ光景を見てきた。朝方テントを出ると、外に馬が来ていたり、目の前をゆったりと牛の集団が横切ったりする。ブータン人は輪廻転生を心から信じているので、動物を見ると「これは私の死んだ父かもしれないし、祖母かもしれない。私もひょっととしたら今度は犬に生まれるかもしれない。」と考える。いや、動物だけでなく、魚や、昆虫、植物など、すべての生命あるものを同じように

平等の輪廻のサイクルの中にあるとみなす。だからダニや蚊さえも殺さない。村や町を歩くと、機織をしている女性に出会う。ブータンでは、女性たちが織り上げた布が日常着や晴れ着、観光客のお土産として売られる。我々が国獣、ターキンを見学に訪れたモテイタン動物園でも、十六歳の織り姫が色とりどりの布地を織り上げて販売していた（写真16）。



写真16：モテイタン動物園の織姫

しかし、ブータンの絹織物は、日本や他の国で売られている絹とは違い、一見麻のような風合いでザラザラとした肌触りである。にわかには絹であるとは信じられなかったが、その理由を知って驚いた。一般には蚕が中に入ったまま繭を茹でて、蚕が繭を作るために吐き出した細い糸を手繰って絹糸にする。なめらかで光沢のあるシルクを作るために、蚕を殺してしまうのだ。しかし、ブータンでは蚕が成虫になるのを待ち、繭を突き破って飛び立って行った後に、敗れた繭から糸を紡ぎ、布を織るので、糸の太さがふぞろいの絹織になるのだ。我々のグループは、行政府と寺院が併存する城郭である、タシチョゾンとプナカゾンを訪れた。

「最も栄光あるゾン」の意のタシチョ・ゾンは首都ティンブーに1641年に建設されたブータン最大のゾンであり、国王のオフィス、国会議事堂、宗教界のトップであるジュケンポの執務室の他、様々な省庁が入っている。国会議事堂前には、仏教を守護する四天王の画が描かれ、堂内に入ると、中央に金色に輝く巨大な仏陀像、グルリンポチェ、シャプドウンの像に、我々の感嘆の声が漏れた。像の前には現国王、前国王、ジュケンポの座が据えられている。四代国王在位時に政教分離が行われたが、国王とジュケンポの座の高さは同じ

で、対等の地位であることが示されている。タシチョ・ゾンには、中央僧院だけが持つ、42種類の病気を治すという特別なお香があり、地方僧院に配布されているということだ。プナカ・ゾンは1635年、シャプドウンによって建立された（写真17）。



写真17：プナカゾンにて

チベットのポタラ宮殿に似た外観で、屋根はドライラマ四世によって寄贈された金で作られている。シャプドウンの遺体が安置されているという、ゾン内の秘密の寺という意のマチェ・ラカンには、現国王、前国王、ジュケンポと二名の世話係の五名のみが入堂を許されるのだそうだ。本堂の仏陀像、グルリンポチェ、シャプドウンの像などの他に、壁面に釈迦牟尼仏の生涯が描かれていた。また、この土地の守護神ナーガラ蛇族を祀る祠があるのも、ブータンの土着信仰を垣間見る思いであった。

その他、第3代国王追悼記念碑であるティンブーのメモリアルチョルテン、ブータンに鉄鎖の橋を建てた高僧が瞑想した場所に建立されたタントン・デワチェン尼僧院、美しい棚田の風景を楽しみながら、あぜ道を歩くこと30分、15世紀に建てられ、子宝の寺として知られるチミ・ラカン寺院等を回った。寺院では、サフラン水で口と頭を清められ、行く先々で五体投地をして仏像や曼荼羅に手を合わせ、マニ車（右周りに回すと、回した数だけ経典を読誦したと同じ功德があるという）を回した。また、ブータンの村や峠、いたるところで、経文を記した布のルンタと、祈りの旗であるダルシンが風にはためいていた。風に一度はためくと、経典を一度読誦したのと同じだそうだ。

ブータン人にとって、寺院や記念碑は観光地ではなく、信仰の対象である。「オン・マニ・ペメホム・・・」マニ車を回しながら、一切衆生、生きとし生けるものの幸福と解脱を祈る。日本では、多くの寺院は観光の対象にすぎず、絵馬には自分の欲望をかなえるための言葉が並べられている（写真18）。



写真18：メモリアルチオルテンのマニ車

日本社会に蔓延する虚無感や孤独感の原因はここにも表れているのかもしれない。人間は自分の欲望を満たすだけでは幸せにはなれない。宇宙も自然も、人間も、動物も、一切の生きものが繋がって生きていて、切り離しては生きていくことができない。これを仏教用語では「縁起」という。すべての存在、現象はお互いに依存しあい、関連しあって今、ここにある、ということだ。縁起ということ意識すると、例えば肉を食べる人間は、自分の食欲を満たすため、生命を維持するために肉が必要なのだが、食べられる動物の側から人間との関係を見ると、食べられる動物の立場を思うことになる。ブータン人はこのことを心より頷いている。だから、生きとし生きるもの全て、一切衆生のために祈るのだ。みんなの幸せが自分の幸せである。みんなのために祈るからこそ、幸せなのだ。そして、各家庭には必ず仏壇があり、大人が仏陀を敬う姿を子供や孫に見せ、教えを伝えている。今、日本で仏壇に手を合わせる家庭がどれくらいあるだろうか。作家の故、藤本儀一氏は、日本国内の少年院を回り、殺人等の凶悪犯罪を起こした少年たちにインタビューを行ったことがある。藤本氏は、これらの少年に挙げられる共通点として、「どのうちにもお仏壇がなかった」、ということ報告している。かつては日本でも、仏壇は信仰

の象徴というだけではなく、家族が手を合わせ、心が一つになる場所であった。30年ほど前は3世代で読経する家族の声が、各家庭で響いたものである。この習慣が家族の絆を深め、目には見えなくても確かに存在する生きとし生けるものとのつながりを目覚めさせる役割を果たすのではないかと筆者は思う。

驚いたことに、ブータンにはお墓がないという。死後49日で、故人は違う生命へと生まれ変わるので、必要がないのだそうだ。火葬した灰の一部を固めて、小さなお地蔵さんのような人型にして祀っているのを村や峠で見かけることはあるが、灰は山等でまかれ、自然に還す。東部のある村では、遺体を百八つに刻み、川に流し、魚に与えるという。浄土真宗の開祖親鸞は、自分の遺体を鴨川に流し、魚のエサにしてくれと、遺言している。これまで多くの生き物の生命をもらってきたからこそ、生きてこられた。その、せめてもの恩返しだというのが、ブータンでも同様の考えだと思う。私は僧侶として、病院チャプレンとして、日米で働いた経験があるが、死を恐れ、自分の生命の最後に向き合うことを拒否する日本人があまりに多いと感じている。生まれた限りは必ず死ぬ定めであるというのに、死を医療の敗北にしかすぎないと思っている医師が、ホスピスにさえ存在する。

ブータン人は穏やかだが、犯しがたい威厳があると、前述の今枝氏をはじめ、多くの人が語る。それは、目の前の欲求に翻弄されがちな人間の自性を仏教の教えで律しながら、今世を生き抜き、命果てても、更なる世界が広がるという死生観に支えられているからではないだろうか。日本は今、孤立・無縁社会といわれるが、不安で寂しい毎日、仏の慈悲に抱かれ、生きとし生けるものとのつながりの中にこそ生かされていると気づくと、他者との絆が深まり、大きな安らぎへと転じられる。

近代化の波が押し寄せる中で、今後ブータン人の精神性にどのような影響があるか心配なところであるが、西洋的個人主義に限界が来ていると気づいている人たちにとって、ブータン人の生き方と、国民総幸福量は、大いに関心の対象であろう。しかし、仏教思想とその実践なしではブータン人の幸福はあり得ず、ブータンを通してでも、仏教の素晴らしさに多くの人たちが気づいてくれることを、筆者は切に期待するのである。

【所感】

「いつ戻ってこられるだろう。」風にはためくルンタやダルシンを見ながら、ブータンを離れる日、心は既に二度目の訪問に思いを巡らせていた。キャンプや民家泊、トレッキングなどチャレンジではあったが、掛け替えのないブータンでの経験となった。ブータンはそれだけ人や動物、自然とのつながりを感じさせてくれる、懐の深い国であった。そして、寝食を共にした第十次訪問団の隊長の吉原博幸先生、副隊長の藤澤道子先生を始めとするメンバーの皆さん一人一人が素晴らしく、生涯忘れられない出会いをいただいた旅となった。このご縁を与えて下さったブータン友好プログラムの松林公蔵先生、松沢哲郎先生、吉川左紀子先生はじめ、この旅を可能にして下さった全ての方々に心からの御礼を申し上げたい。

（担当：千石真理）

【引用文献】

- 1) 今枝由郎、「ブータン—変貌するヒマラヤの仏教王国」大東出版社、1994
- 2) 今枝由郎、「ブータンに魅せられて」岩波新書、2008
- 3) 五木寛之、「百寺巡礼 海外版 ブータン」講談社、2011
- 4) 高野秀行、「未来国家ブータン」集英社、2012
- 5) 御手洗瑞子、「ブータン、これでいいのだ」新潮社、2012
- 6) 地球の歩き方 ブータン2012～2013年版 ダイアモンド社、2012

Summary

Valuing life and death – Tibetan Buddhist teachings and everyday practices in Bhutan

Rev. Mari Sengoku, Ph.D.
Kokoro Research Center

Key words: interdependence, bond with the environment, cause and effect, happiness

Bhutan, a Buddhist country, is widely known for its development and promotion of the concept of GNH (Gross National Happiness), which has recently drawn attention from scholars all over the world. This paper does two things: first, it outlines in brief the history of Buddhism in Bhutan, and its role in the shaping of the Bhutanese state; second, from the author's perspective as an ordained Buddhist minister, the paper compares observations made of the lived expression of Buddhist values in Bhutanese daily life with those in Japan. It was found that Buddhist teachings and traditions were strongly expressed by Bhutanese people in their everyday lives, in marked contrast to the situation in modern Japan. In particular, the Buddhist values of 'cause and effect,' 'interdependence,' and the notion of a 'bond' between all creatures and their natural environment were strongly expressed. The author further explores the link between these values and the concept of happiness in Bhutan.

7. 交通

【概要】

本項ではブータン国における交通について説明する。ブータンの国内交通は鉄道がないため、自動車もしくはバスによって輸送が行われる。

ブータンの道路事情については次のような特徴が挙げられる。まず、山がちな国ではあるが、山は神聖なものであるためトンネルが掘れない。そのため、都市間の道路は曲がりくねった道で3000m近い標高を物峠をいくつも超えるものとなっている。また、アスファルトによる舗装も、一部の都市やティンブー〜パロ間のハイウェイを除いてはあまりされておらず、ほとんどが未舗装の道路である。

ブータンの道路は、東西を結ぶ幹線道路があり、そこから枝分かれしている道路を利用することでほかの都市に移動するという形になっている。このため、道路はネットワーク化されているといえない。未舗装であることも相まって、ブータンの道路事情はあまりよいものとはいえず、国内の移動には多大な時間がかかる状況である。

本項では、以下、航空機・バス・タクシーといった公共交通機関、そして自家用車についてブータン国の交通の現状について記していく。

【航空機】

ブータンに乗り入れる飛行機は国営のドゥルク・エアーのみである。このほか、2011年より国内線が就航して、かつては移動に時間がかかった東部への移動が便利になった。

ブータンの空の玄関口は西部にあるパロのパロ国際空港であり、現在すべての国際線はこのパロ国際空港に到着する。

【国内航空】

国内線としては現在ドゥルク・エアーとタシ・エアーが就航している。

タシ・エアーはブータン国内で最初の民間航空会社として2011年に設立された。パロ国際空港を拠点として路線を運行しており、その就航地は、中部にあるプムタンのバツパラタン空港、東部にあるタシガンのヨンプラ空港である。2011年12月18日にそれぞれの都市に向けて就航した。

ただし、タシ・エアーは財政的問題を理由とし、2012年5月より政府との合意のもと、すべての国内線の運行を取りやめた。これらの路線が今後も安定的に運行されるかどうかは2013年8月現在、未だにわかっていない。

一方、ドゥルク・エアーの路線は現在パロ〜プムタン間を週に2本、パロ〜ヨンプラ間を週に1本設定されている。

表1 ブータン国内線の所要時間および運行頻度

運航会社	出発地	到着地	所要時間	運行頻度
ドゥルク・エアー	パロ	プムタン	100分	週1往復
ドゥルク・エアー	パロ	ヨンプラ	35分	週2往復

【国際航空】

国際線は、現在ドゥルク・エアーのみが運航しており、デリー・ガヤ・グワハーティー・バグドグラ・コルカタ・ダッカ・バンコクに就航している。パロ空港は航空管制官を持たず、パイロットが自らの情報・知識をもとに離着陸する必要のある有視界飛行の空港である。このため、日中しか空港は運用することができず、天候によってはこれらの国際線が到着できないこともある。

このほかにも、2013年7月20日ブータンのニュースサイト「KUENSEL ONLINE」は、国内線をついで運航していたタシ・エアーがコルカタ経由でパロからバンコクを結ぶ国際線を運航する方針を示したことを報道している。タシ・エアーは現時点では、ドゥルク・エアーよりも大幅ではないものの、国際線料金を安くすることを視野に入れている。



写真19：パロ国際空港におけるドゥルク・エアー

【バス】

バスはブータンの都市間輸送において最も使われる交通手段である。

市内バス

首都であるティンブー市と南東部に位置するプンツォリン市においては、ブータン郵政公社（Bhutan

Postal Corporation) によって市内バスが運行されている。

ティンブー市内においては、市内バス路線は8系統あり、そのすべてが市内中心部にある市内バスターミナルを拠点として運行している。運行頻度としては、最も運行本数の多い2系統で30本（ラッシュ時15分間隔、閑散時30分～1時間間隔、7時から19時半まで）、最も少ない6,7,8系統で10本（1時間間隔、7時から19時まで）であり、どの系統も20時にはバスターミナルに到着して運行を終了する。時刻表は市内バスターミナルにある張り紙もしくはインターネット上で調べることになり、各バス停留所においては「City Bus Stop」と書かれた標識があるのみである。

バスの車両としてはブータンのバス車両として一般的なマイクロバスが用いられているが、その一方で2012年10月に中国製のノンステップバスが新造・導入された（写真20, 21）。これにより、都市交通の近代化は図られる見通しとなっており、将来的には日本のようにプリペイドカードを用いて乗車することが出来るような構想も持たれている。また、他の都市においても市内バスを運航するという方針も同様に郵政公社によって示されている。



写真20：2012年に新造されたノンステップバス



写真21：ティンブー市内バスターミナルで各系統が待機する

都市間バス

都市間バスは長距離旅行の一般的な交通手段であり、首都から地方都市だけではなく、地方都市間も結ぶ役割を果たしている。主要な都市にはバスターミナルや、都市間バスが止まる停留所が存在する。都市間バスを営む事業者は10社程度あり、それぞれが路線を開設して運行している。

ティンブー市内においては、ティンブーバスターミナルがあり、そこから多くの都市間バスが出発している。特にティンブーから中部のブムタン、南部のゲレフ、南東部のプンツォリン、空港のあるパロへのバスの本数は多い。

車種としては、インドのエイカーモーターズのStarlineもしくはトヨタのCOASTERが用いられ、バスターミナルの時刻表では用いられる車種が明記されている。これにより、長距離バスを利用する乗客は自らの乗るバスの車種を積極的に選ぶということやそれによって値段が変動するということも考えられるが実際の所は不明である。

長距離バスに用いられる車種がマイクロバスであるため、座席間隔などは狭く、居住性に富むとはあまりいえない。



写真22

長距離バスに荷物をつみこみ出発を待つ人々

このほか、南東部のプンツォリンからは週に2便インドのコルカタまでのバスが走る。

【タクシー】

都市間バスと同様にタクシーも都市間の交通手段として用いられる。都市間バスの本数があるとはいっても日に数本程度であり、また主要な都市しか停車しないということもあるため小さな町などに行く場合にはタクシーが重用される。特に、幹線道路から離れたところでは都市間バスも走らないために、公共の交通手段はタクシーのみに限られる。このため、小さな町でもタクシーは数台はあるのが特徴である。

ブータンのタクシーは、日本と同様に一台をチャーターする形で利用することも出来るが、同じ方面に行く人々を募って相乗りでいく方法が一般的である。ティンプーから地方に行く場合は市内にあるタクシー乗り場に行き、乗り合いタクシーを募ることになる。



写真23：ポプジカで見たタクシー

7人ほどの家族が1台のタクシーに乗っていた。

【自家用車】

ブータンの自家用車普及率はあまり高いとは言えないが、近年の経済成長により首都ティンプー、西部パロを中心として自家用車の普及率は上がりつつある。しかしながら日本の都市部と比べると車の数は圧倒的に少なく、町中や幹線道路において多く見られる程度である。地方の農村部に行くと車の数はさらに減少し、富裕層や業務上必要な人々、またタクシードライバーが自らの営業のために車を持っている程度となる。

主に使われている車のメーカーとしてはトヨタやスズキのインドの合弁会社であるマルチ・スズキ・インド、韓国製のヒュンダイが挙げられ、ブータン国内には生産拠点が無いためすべてがインドからの輸入となっている（写真24）。インドから輸入する関係上、タタ社やマヒンドラ社といったインドのメーカーによるくるもしばしば見られる。車種は軽自動車が多く、観光業者など悪路を頻繁に走る必要性のあるところはランドクルーザーなどの四輪駆動車を持つ傾向にある。現地にて車について話を聞いた際には、日本車は性能がよく寿命が長い一方で値段が高い、韓国のヒュンダイ製は値段が安い性能面では不安が残る、マルチ・スズキがもっとも庶民の車としてよく利用されているとのことであった。



写真24：ティンプー市内で見た車
これはインドのマヒンドラ社製である

【まとめ】

以上、本項ではブータンの交通機関についてその概略を記した。ブータンの国内交通は長きにわたってその地形的制約、道路事情の悪さゆえにあまり発達していないものとなった。しかしながらここ数年でいくつかの道路計画が立ち上がり、新しい道路の建設が行われつつあるということ、また国内線の就航が行われたことによりその環境は激変しつつある。そのような観点から考えると、ブータン国内の交通は現在過渡期に入りつつあり、非常に興味深いものとなっている。

数年後これらの交通機関がどのように変化し、ブータン国民にとって国内移動がどれほど改善されるかという観点ではこれからますます目が離せないものであるということを最後に記す。

【参考文献・URL】

- 1) Bhutan Postal Corporation Ltd. City Bus, <http://www.bhutanpost.com.bt/index.php?id=71> (2013年3月30日閲覧)
- 2) 15 new city buses for Thimphu Thromde| BBS, <http://www.bbs.bt/news/?p=18283> (2013年3月30日閲覧)
- 3) Thimphu Thromde Bus Service Route Network Plan, <http://www.rsta.gov.bt/download/CityBusNetwork.pdf> (2013年3月30日閲覧)

【所感】

ブータン訪問は非常に印象深いものであった。

私たちがブータンと聞いて思い浮かべるものはやはり「幸せの国」であるとか、「カッコいい王様が統治する平和な国」ということであろう。これらは数年前からマスコミによって急速に植え付けられたイメージであり、その実態について記した書物もいくつか出版されている。私も最初は「幸福の国というのはどんなところだろうか。そこでクラス人々はどんなことを考えているのだろうか。」と考えて訪問団に応募した。

初めてのブータンは何もかもが新鮮であった。日本とは大きく異なる国内事情、日本の昔の風景を彷彿とさせる農村風景、我々の訪問を心から歓迎してくれた人々。そのどれもが今の日本ではあまりみられない風景ではないのだろうか考えるものであった。

道中、サムテガンという村に3日滞在した。滞在中は、ひょんなことから、村の人といっしょに家の最上階の床を固める作業に参加したり、農家を訪問してどのような暮らしをしているかをみせていただいた。印象的だったのは、初めて会った村の人の家に招かれてお茶を振る舞われたこと。我々には付き添っているガイドもいないなか、そこで応対してくれた14歳の女の子は明らかに生まれて初めて見たであろう日本人の訪問者に対して、王様の写真を貼り付けたアルバムを見せてくれたり、韓流スターのシールを貼ったノートを見せてくれたりと、我々の訪問を歓迎してくれた。見知らぬ訪問者であるにも関わらず、バター茶をいっぱい振る舞ってくれたり、ザオという米をあげたポン菓子のようなものをお土産にくれたりと、すごく私たちと仲良くしてくれた。村の人は、全く見知らぬ外国人である私たちに対して、ほとんど警戒することなく非常に親しげに接してくれる。そして、お互いがただ純粋にこの貴重な出会いの機会を喜び、ずっと仲良くしていきたいですねと話す。村の人々とのそういった気持ちの障壁をなくした交流は、私にとってはすごく貴重な経験で、今回の訪問で強く印象に残るものであった。

日本では「幸せの国」として知られるブータンであるが、決してすべての人々が決して「幸福」に過ごしているというわけではない。やはり、ブータンにおける幸福は宗教的な背景や家族・親戚の強固なつながりによって成立しているのかなという印象の方を強く受けた。他人や家族を本当に信頼するといった、ブータンの人々の純粋な行動。それは、経済成長や情報化社会を経た現代の私たちが忘れ

去ってきたものともいえるのではないのだろうかとも感じた。

「なぜブータン人はあれだけ人を信頼してくれるのか。なぜブータンの人々は幸せそうに生きているのか。」という疑問。ブータンに滞在して、人々とふれあえばふれあうほど、このことはずっと気になってきた。毎日のように訪問団の方とも議論を重ねて、それを満足するような答えを導き出したかった。仏教が専門の千石先生は、仏教による価値観やその教え、それがブータンの人々にどのように影響しているのかということをお我々に教えてくださった。団長の吉原先生や西垣さんは自らの長い人生経験に基づいて、ブータンの人々の気持ちを考えて話をしてくださった。坂本先生や藤沢先生はブータンで研究したことによって得られた知見から自らの考えを話してくださった。結局、なぜブータン人が幸せなのかと言うことについては様々な要因があり、明確な答えは出なかった。しかし、このような話し合いを通じて様々な方の意見を聞いたのは、様々な分野の人々が集まるこの訪問団ならではのことだと感じた。

ブータン国内は現在非常に大きな変革の波にのまれている。都市では、近年の観光客の増加に伴って観光産業が発達し、徐々に人々の間に格差が生まれている。農村では、若い人が都市にどんどん出て行き、その後農村に戻ってくる人が少なくなっているという過疎化が徐々にではあるが進行しつつある。問題はちょっとずつ起こり出しているのだと思う。そのなかで、これからどのようにしてブータンは自らの発展の道を切り開いていくのかということとは非常に興味深い。現在の途上国は先進国の支援を受けながら先進国のよくない部分をうまく除きつつ発展することが可能である。ブータンがどのように発展していくかということを訪問した立場としてはしっかりと見届けていく必要があると感じた。

最後に私の専門に絡んだことを少し記させていただく。私が興味を持っていることは、農村地域における地域再生および自立である。ブータンの農業は主要作物においては自給率が高く、余った野菜をインドに輸出している。農村地域に住む農民は自らが育てた野菜を近くの都市に売りに行き、作物を育てない時期は出稼ぎに行くことで生活の糧を得ている。こういったことから、ブータンの農村はある程度自立していると考えることができる。ただし、今後ブータンの国家自体が発展していき、国内の物価があがるにつれて相対的に農家の所得は低くなっていく可能性は十分にある。その

ような状況下でブータンの農村はどのようにして存続していくのか。うまく未然に解決できる方法を考える事は非常に意義がある。「疲弊した農村をどのようにして再生していくか」といった研究は日本では盛んである。その研究成果は十分にブータンにも適用できるであろうし、また日本とブータンが協力して研究していくことも十分に可能であろう。農業土木といった観点で見ると、日本がブータンに貢献できる面は非常に多くあると感じる。

今回の訪問団、医学部の方をはじめとして、アジア・アフリカ地域研究研究科の方や、農学部のお隣の学科である森林学科の方、そして職員さんといったさまざまな分野の方が集まることで、自らの専門分野を超えた深い議論、有意義な話し合いを行うことができたと思う。

今回、訪問団に選んでくださった事務局の皆様、そしていっしょに旅することが出来た団員のみなさま、ブータンで時には楽しいジョークを飛ばしながらも真剣なガイドをしてくださったSonamさん、Dorjiさん、そしてブータンの人々。すべての方に感謝はつきないし、またいつかブータンを再訪したいと強く思った10日間であった。本当にありがとうございました。カディンチェラ！

（担当：谷 悠一郎）

8. 自然

ブータンは北にヒマラヤの7000 m級の山々が連なる一方、南のインドとの国境付近では標高が200 mほどになる（首都ティンブーは標高2320 m、旅程を通じての滞在地点は標高2000-3000 m）。その規格外の高度差が、九州ほどの大きさしかない国に多様な環境を生み、多様な動植物相を生みだしている。さらに、環境を犠牲にしない発展を目指すブータン政府の方針により、多くの自然が開発されずに残っている。2001年度の調査によると、観光客全体の7.3%もの人がトレッキング目的で入国しており、ブータンの自然を堪能するために、世界中から観光客が訪れている。今回のブータン訪問は1月18-28日で、都市部と農村部に滞在した。

1. ブータンの気候と動植物

ブータンで確認されている動植物数は、東ヒマラヤ固有種の60%を有し、哺乳類166種、鳥類770種、植物5446種が確認されている。このような多様な種の生息は、ブータン国内の高度差のために生じる多様な環境に由来している。大きな標高差が、熱帯雨林から雪山まで含む多様な環境を生み出し、多様な生物を育てている。今回の旅程でも、森林限界を越えた裸地から針葉樹林、照葉樹林と観察することができた。照葉樹林帯ではブナ科の樹木が多く、キジバトやシジュウカラのさえずりが聞こえてくる農村部では、まるで日本にいるような不思議な気持ちになった。木がまばらで下草が何も生えていない植生も見られた。牛の放牧、山火事、人々の薪炭材の利用や高山の厳しい環境などが原因だろう。美しい花もブータンの大きな魅力の一つである。しかし、残念ながら、今回の訪問は1月の後半であったため、見ることはできなかった。標高3000 m付近ではシャクナゲがいたるところに分布しており、春先にこれらが開花すると圧倒されるようなきれいな景色が広がるのだろう、と容易に想像できた。また、サルオガセやヤドリギといった着生植物や寄生植物も多く見られた。ブータンは亜熱帯にあたるが現地ガイドさんは話していたが、経由地のバンコクやインドのガヤとは大違いの寒さである。ブータン到着後、パロ空港には雪が積もっていた（山だらけで平地の少ないブータンに、無理矢理つくられたような小さい空港である。滑走路の側に、山がそびえており地表

すれすれを飛ばなければならないことや、滑走路が短いことから、技術のある数少ないパイロットしかパロ空港に離着陸できない）。ブータンの位置は北緯26度と沖縄と同じくらいであるが、高標高のため、夜は極度に冷え込む。しかし、昼は日差しが強く、暑い。この一日の中の寒暖の差は高山地域ゆえの乾燥で空気中に水分が少ないことが原因だろう。私がブータンを訪れたのは1月で、寒さ対策にダウンの中にセーターと上着を着ていたが、日中はTシャツ1枚で大丈夫な日もあった。

ドチュラ峠から見たヒマラヤ山脈の景色には、心を奪われた。ブータンの最高峰であるガンカプンスムは7500 mを越えるような山である。富士山が3776 mであるから、とんでもなく大きいことは分かるのだが、自分のいるドチュラ峠（3150 m）も高いので、高さに関してはよくわからないのが、本音ではある。しかし、視界の端から端まで広がるヒマラヤ山脈の景色の美しさは、雄大という言葉に尽きる。ドチュラ峠からはガンカプンスム（7570 m）に加え、マサガン（6800 m）を見ることができた。マサガンは1985年京大隊により初登頂を果たした山である（写真25）。峠にあるレストランに備えられている双眼鏡からマサガンの雪山の断崖を覗きながら、よくあんなところまで登ったものだと、ただただ感心するしかなかった。



写真25：マサガン峰

ターキンという動物をご存知だろうか。ターキンは、ウシとヤクのような外見の生物で、ブータンの国獣である（写真2）。ブータンの国民性を反映したかのように大人しく、平和な顔つきをしている。かつて、動物園では、多くの種類の動物を飼育していたが、チベット仏教の精神に反するというで、多くの動物たちが野に返された。しか

し、ターキンだけは人に慣れすぎてしまったため、未だに施設で保護されており、広いフェンスに囲まれた場所に20頭ほどでのんびりと暮らしている。



写真26：ターキン

ポプジカでは、オグロヅルを観察することができた。オグロヅルはヒマラヤの大山脈を越えて渡りをすることで有名である。ポプジカの大きな湿地帯に、50羽近い群れが地面をついばみ、餌をとっていた。北海道のタンチョウに似ているが、首全体が黒くなっているのがタンチョウと違う。最初の一群の他に、人家の畑で餌を探している親子や、10羽ほどの編隊を見かけた。ポプジカは電気よりツルをとった村として有名である。電気を村に通せば、電線を張らなければならない。しかし、電線を張るとツルが引っ掛けて死んでしまうことがある。そのため、村民はツルのために電気をあきらめたのである。もっとも、今は電線を地下に通すことで電気を通している。ポプジカではオグロヅルを観察するためにちょっと立ち寄っただけで、地元民のツルに対する思い等を聞けなかったのは残念である。私が訪れた1月はポプジカで越冬しており、春になると、繁殖のためにチベットへと旅立つ。渡りの前にポプジカの上空を何回も旋回してからチベットに向かう様子が村を見守っているように見えることから、ガイドさん曰く、神として崇められているとか。ポプジカにはオグロヅルの観察所があり、環境教育に関する展示もしていた。しかし、こんな環境破壊とは無縁そうなところすでに環境教育が行われていることに驚いた。未然に環境破壊を防ぐという意味で理想的である。また、ターキンやオグロヅルの他にも、バ

スで移動中にグレイラングール、サルやヤクに遭遇することができ、ブータンの動物たちを見ることができた。田舎では、毎日のように猛禽類が現れ、豊かな自然が残っているを感じさせた。キジも道端で見ることができた。

2. ブータンの暮らしの中の自然と開発

ブータンの村の暮らしは、未だに自然と密着に関わっている。今回の訪問では首都ティンプーだけでなく、サムテガンという村でも2泊をテントで、1泊を民家で滞在させてもらった。滞在中は、ガイドさんに村内を案内してもらい、民家の中を見せてもらったりした。サムテガンの暮らしを村への訪問を通して観察していたが、いまだに山から薪炭材を取ってきており、かまどにまきをくべ、暖をとっている。キャンプ地で私たちのテント泊をサポートしてくれた旅行会社の人たちも、高い場所にある枯れ枝にロープを引っかけて折り、料理で使う薪を調達していた。ポプジカで滞在したホテルでも部屋は暖房に薪を使っており、そんなことにももちろん慣れていない私はかなり苦戦した(写真27)。



写真27：ポプジカのホテルでの暖房

サムテガンで、道を歩いていると、急に上から大量の落ち葉やら枝やらが道に落ちてきた。何かと思い、見上げると横の急ながけの上の茂みからおばさんたちが顔を出した。村人が何人か集まり、暮らしの中で使う落葉落枝を集めていた。大量の葉が牛舎の横に積み上げられていたので、たずねてみると、牛舎の底に敷いたあと、糞尿混じりになった葉を畑にまくのだそうだ。畑の肥料にするとともに牛舎の清掃も兼ねている。子供たちの遊び道

具も自然から調達しており、木の枝やつるを用いてアーチェリーの道具を自作して遊んでいた。

私が農学部森林科学科に所属していることを話すと、サムテガンの地域診療所の医療スタッフから、サムテガンの林業事務省を訪ねさせていただけるとお話を頂いた。夕方の5時すぎでも事務所を閉めていたのだが、職員の人はこちらよく事務所を開けて、話をしてくれた。突然の申し出をすんなり了承してくれるのもブータンの田舎ならではの。事務所で、ブータンの環境関係の各部署についての説明やブータンの森林管理や動植物の保護についてのお話をしてもらった。ブータンの森林被覆率は72.5%で、木材は完全に自給している。森林を過度に破壊しないように、森林の調査を行い、切る木を選択して伐採する択伐を行っている。ブータンは環境破壊がまだ問題化する前の国だが、他国を教訓にし、森林を破壊しないような政策をとっているのである。環境教育も盛んで、植林も行われている。保護する動物のリストには、アジアゾウ、レッサーパンダ、ヒョウ、クジャク、キジ、サイチョウなどが含まれていた。

サムテガンで我々のテントを訪ねてくれたブータンの若者の話が印象的だった。「今の先進国のような発展は間違っている。ブータンは独自の発展のしかたを探らなければならない。」今の先進国の環境を犠牲にした発展に警鐘を鳴らす発展途上国の若者に驚かされた。私は東南アジア諸国に行くことが多いのだが、日本を金持ちで技術の進んでいる国として、うらやまれることが多かったため、すごく印象的だった。そもそも発展途上国と先進国という言葉が表すような発展途上国が先進国を追いかけているようなイメージ自体が間違っている。先進国が先に進んでいるわけでないし、発展途上国が発展しなければならないわけではないのである。しかし、多くの発展途上国の都市は、先進国と同じように都市化し、公害の問題まで同じように起こしている。むしろ、発展途上国は、先進国の犯した失敗を見て、先進国と違う発展を選ぶべきなのである。豊かな自然と調和可能な無理のない発展と、自然の大切さを忘れない暮らしを、ブータンがいつまでも続けてくれることを切に願っている（写真28）。



写真28：サムテガンの農村風景

【参考文献】

中尾佐助「秘境ブータン」岩波書店、2011年
 平山修一「現代ブータンを知るための60章」明石書店、2005年

【所感】

ブータンと聞いて、まず、思いつくのは、「幸福の国」という言葉だった。先進国と比べると、劣悪な環境に暮らすブータン人は、一見幸せな環境に暮らす先進国の人より幸福だという。幸福とは何だろうか。この問いへの手掛かりが今回の訪問で見つけられれば、と思った。

私は、ブータン訪問を通じて、チベット仏教を敬虔に信じていることがブータン人の幸福の理由だと考えた。チベット仏教の教えに敬虔でいたい欲がないのである。輪廻転生を信じ、人間が自然の一部として、めぐりめぐっていると信じ、今でも自然と調和した暮らしを営んでいる。

日本では、農村に若者はいなくなり、田畑は荒れ果てていつている。第一次産業や自然はいつの時代になっても人間にとって不可欠な価値を持っていると思う。それを蔑ろにしている今の世界のあり方に疑問を投げかける一つの発展途上国の存在は大きい。自然と調和する暮らしを実現する方向に舵を切ることが大事だと、このブータン訪問を通して気持ちを強くした。これから、どう日本が進むべきかのヒントがブータンにある気がする。

しかし、現状としてブータンでも都市化、国際化の波は迫ってきている。若者は都市へ出稼ぎに行き、TV、インターネットの解禁によって、各国の情報がなだれ込んでいる。20年後のブータンはどうなっているのだろうか。チベット仏教の教えに

敬虔に「足るを知る」暮らしを続けているのか。他の発展途上国、先進国の跡を追うのか。いつか、ブータンを再訪しようと思う。

最後に、このような貴重な機会をくださった京都大学ブータン友好プログラムの関係者の皆様方に深く感謝いたします。これからの自分の生き方に少なからず影響を与えるであろう訪問になりました。本当にありがとうございました。

（担当：丸山晃央）

9. 食

【穀物、野菜】

首都ティンプーでは、毎週日曜に野菜市場が開かれる。この数十年の日本からの技術指導（西岡氏）によって、国内でもかなり生産されるようになった。市場には、米（赤米）、トウモロコシ、各種の唐辛子（エマ）、豊富に自生するキノコ（シャモ）、インゲン豆、キャベツ、トマト、キュウリ、ズッキーニ、タマネギ、カリフラワー、ニンジン、ナスなど、日本と同じような野菜が所狭しと並ぶ（写真29）。少し特殊なものとしてマツタケ（サングシャモ）がある。日本へのお土産用に、秋には生で、それ以外は乾燥マツタケとして売られているが、香りは薄い。果物も豊富で、リンゴ、オレンジ、バナナ、柑橘類などを見かける。これらはブータンの低緯度（南）地帯で生産されている。国内産業生産額の7割が農業、残り3割が観光と水力発電（インド向けの売電）であることからしても、農業が重要な産業となっており、野菜、穀物中心の豊富な品揃えにも納得が行く。



写真29：食料品店。豊富な野菜干し魚、卵などが並ぶ

【獣肉、魚肉】

イスラムやインドのように、豚肉や牛肉を禁ずるわけでもないが、宗教上の理由で基本的に殺生禁断の国である。ブータン人は牛、豚、鳥、魚などを屠殺して食肉にすることは禁じられている。唯一、自然死した家畜は食べても良い。しかし、生肉として食べることはなく、どの家庭に行っても、牛肉や豚肉の脂身を薄くスライスして軒下に干して乾燥肉として保存し、これを料理に使う（写真30）。自然死以外の獣肉は、インドなど、外国で

屠殺されたものであれば問題ないようであるが、普通の家庭では全く見かけなかった。



写真30：干し肉（左が牛、右が豚）

魚釣りも禁じられている。従って、日本のような生の魚などは全くない。商店には、輸入された干し魚が売られている（写真31）。



写真31：干し魚

【乳製品】

宗教上の理由から殺生禁断とされており、重要なタンパク源となるのが乳製品である。ほとんどの農家は、牛、ヤギを飼っており、これから取れる牛乳などから、チーズ（ダツィ）、バターを作っている。料理の主な材料はこれらの乳製品だ。後述する乾燥チーズもある。

【嗜好品】

タバコは国家レベルで禁止されている（2004年12月よりタバコの製造販売が全面禁止）。代わりに伝統的なドマと言われる噛みタバコのようなものがある（写真32）。これはキンマの葉で、ピンロ

ウジュの実と石灰少々を包み、これをゆっくり時間をかけて噛むもので、唾液が赤く染まる。道路には、吐き捨てた赤いシミが無数に見られる。タバコ同様、軽い興奮作用があるらしい。



写真32：ドマ。キンマの葉で、ビンロウジュの実と石灰少々を包んだもの。道路には、吐き捨てた赤いシミが無数に見られる。

店で売っているお菓子類は、ほとんどがインド、タイからの輸入で、日本の製品も見かける。サムテガンの家庭を訪問した際、まず例外なく出されるのがザウ（米のポン菓子のようなもの）とミルクティー（ガジャ）である（写真33）。チベット風のマテ茶（バター茶）は滅多に出てくることはない。



写真33：ザウ（米のポン菓子のようなもの）

乾燥したチーズ（水牛の乳）もあちこちで売られている（写真34）。口に入れて、時間をかけて食べるのだが、無味で非常に硬く、丸一日たっても融けることはない。



写真34：干しチーズ。非常に硬く、日本人には文字通り歯が立たない。

お酒は、各家庭で醸造することを許されている（販売は出来ない）。大麦、米、トウモロコシなどを原料とする。発酵酒（シンチャン）は、アルコール度数5%程度でビール程度。これを簡単な装置で蒸留したものがアラと呼ばれ、アルコール度数20～30%。暖めて卵を入れて、ちょうど卵酒のようにして飲む事が多い。地ビールも販売されている（ドゥルク11000、レッドパンダ）（写真35）。



写真35：ブータン国産ビール「DRUK 11000」

【料理】

主食は米（赤米）である。非常に沢山食べる（写真36）。平均的な男性で、1日1kg食べると言われる。村の小さな子供が、ほとんど副食なしに、ご飯だけを食べているのを見かけた。



写真36：主食の赤米



写真10 青唐辛子

朝食に供されるのが、そば粉で作ったパンケーキ（クレ）（写真37）。



写真37：そば粉のパンケーキ、クレ。

国民食と言われるのが、青唐辛子（写真38）をチーズと炒め煮にした「エマダツィ」である。ほとんど毎食出ると言っても過言ではない（写真39）。非常に辛いですが、これを「野菜」として沢山食べる。ブータン国営ドゥルク航空の機内食にも出てくるほどである（写真40）。



写真39：エマダツィ。写真は青唐辛子と白唐辛子を使ったもの。



写真40：機内食で「野菜カレー」と称して出されたエマダツィー。

人気の高いのが、チベット風餃子（モモ）。中国、日本の餃子と異なり、ひき肉を必ずしも使わない。具は野菜とチーズが主流。基本は蒸したもので、油で揚げたものもある。トウバンジャンのような唐辛子調味料（エゼ）をたっぷりつけて食べる（写真41）。



写真41：野菜とチーズのモモと調味料のエゼ

ブータンの食生活は、コメを主食とし、副食は野菜（主として唐辛子）と乳製品、鶏卵、少量の肉という質素なものである(写真42)。農村部の人たちは、栄養不足気味で、子供達に肥満は見かけなかった。また、女性の貧血が多いと聞く。今後の経済発展で、栄養状態が好転することを期待したい。（担当：吉原博幸）

【参考文献】

- 1) ブータンの文化, ウィキペディア
- 2) 地球の歩き方, ブータン2012～2013年版, ダイヤモンド社



写真42：米と野菜中心の食生活。一般の人々の食事はこれよりもっと質素である。

10. ブータンの人々と言葉

【はじめに】

ブータンは多民族・多言語国家である。それは、旅行者であるわたしたちにも、視覚・聴覚に飛び込んでくる。さまざまな地域の人が行き交う空港や首都ティンプーでは、華やかな色使いの服を身にまとった東部の人々や、ブータンの民族衣装ではなく洋服を着た彫りの深いネパール系の人々を見かけることが出来た。

【背景と概要】

ブータン人の主要民族は、チベット系のブータン人である。その他にネパール系ブータン人や、東部のツァンラ人などがある。特に、ネパール系ブータン人は、19世紀末ごろから移住してきた人々で、1980年代には人口の30-40%を占めていた〔宮本2009: 6-8〕。

1989年の伝統保護のための布告では、「民族衣装の着用、国語ゾンカの習得、伝統的礼儀作法の遵守」が「ブータン人」の義務とされている〔宮本2011: 403〕。現在、ブータン政府は宗教や民族別の人口比率を公表していないものの、複数の民族が共存していることは周知の事実である。

ブータンの国語はゾンカ語であり、学校の中ではゾンカ語と英語、初等教育に限って地方の言語が使用されている。その他に、ブータン政府の観光局のホームページによると、国内では19以上の「方言 (dialects)」が話されており、「谷を超えるとに言葉が異なる」と言われる。主要な言語としては、東ブータンのツァンラで話されているツァンラカ語や、南ブータンで話されているロサンカ語などがあげられる。また、中央ブータンのケン族はケン語を話し、ブムタン族はブムタン語を話している〔ブータン政府観光局 2013〕。さらに、プロカト語やゴンデユク語のように、消滅を危惧されるほど母語話者の少ない言語もある〔UNESCO 2013〕。次の(表3)は、ブータンで話されている言語の一覧である。

この表のうち、△の印の着いている9つの言語は、高齢者は使用しているが、若年層が使用しない消滅危機言語とされている。ゾンカ語を含めたその他の10の言語も、若年層が学校や職場といった家の外では使用しない言語として、程度の低いものの消滅の危機にある言語とされている。また、表か

らわかるように、いくつかの言語はインドのアルナーチャル・プラデーシュや、アッサム、中国でも話されている。これらは主に非チベット系の言語である。

表3 ブータンの言語

言語名	地域	話者人口
Dzongkha	西ブータン	160000
Tshangla	東ブータン、インド、中国	138000
Cuona Menba	ブータン、中国、インド	50000
Bumthang	ブムタン	30000
Lepcha△	サムチ県、インド、ネパール	30000
Cho-ca-nga-ca-kha△	モンガル県、ルエンツェ県	20000
Dzala	タシガン県、ルエンツェ県	15000
Kurtöp	ルエンツェ県、クル川西岸	10000
Lakha△	ワンディ・ボダン県	8000
Brokpa△	サクテン谷、ワンディ・ボダン県	5000
Kheng	ケン地区、シェムガン県ブムタン南部	4000
Lhokpu△	サムチ県	2500
Chali△	モンガル北部、クル川東岸	1000
Dakpa△	タシガン県、インド	1000
Gongduk	モンガル地区、クル川	1000
Nyengkha	マンデ川	1000
Black Mountain△	中央	500
Brokkat△	ブムタン	300
Nupbikha	ブムタン県、トンサ	不明

〔UNESCO 2013〕をもとに筆者作成。話者人口は1991年当時。

わたしたちが覚えた僅かなゾンカ語はどこでも通じたし、子どもは皆英語をある程度理解していたので、旅行中にさほど不便をすることはなかった。

ゾンカ語はチベット語の南部方言であり、チベット文字を使って表記される。近年になって文法書や辞書が整えられ、表記が統一された。この言語は、行政を司る「王宮（ゾン）の言語（カ）」という意味で、国内では西部を中心に話されていたが、1980年代に国語として制定された。

「ブータン人」という国民の創出と、ゾンカ語政策には深い関係がある。ゾンカ語は、もともと西部で話されてきた言語である。これは、西部のチベット系ブータンの社会と文化が「ブータン的」と認識され、ブータン国家の核として「ブータン文化・ブータン社会」の特性を表象する形となっている。すでに述べたように、1989年の布告により、ゾンカ語は単なる象徴や知識ではなく、具体的に実践し、身に付けることが求められるようになった〔宮本2011: 404〕。

一方で、国内における英語の威力は無視出来るものではない。英語は教育言語として広く国民に浸透しており、「すべての教科をゾンカ語で教えたくても教えられない」状態が続いている。このように、ブータンでは国語であるゾンカ語、若年層を中心に浸透度の極めて高い英語、そして消滅危機にさらされた地方語という、三段の言語層が複雑に折り重なっている様子がわかった。



写真43：BHU（ヘルス・ユニット）の看板



写真44：道路標識



写真45：玄関に書かれたゾンカ語

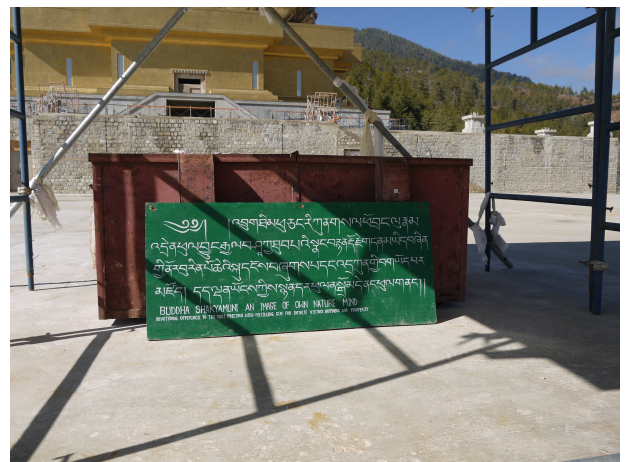


写真46：ブッダ前の看板

【京都大学第10次ブータン訪問団として体感したブータンの言語】

ゾンカ語の挨拶程度しかままたらなかった筆者には、ゾンカ語以外のブータンの言語を聞き分けることはとても出来なかった。ガイドや商店主とは英語でコミュニケーションを図っていた。しかし、時々耳慣れた言葉に出くわすことがあった。ヒンディー語である。

ティンプーでゾンカ語の辞書を購入しようと書籍を探していたところ、訛りのあるヒンディー語の会話が耳に飛び込んできた。どうやら、インド系の男性客が、文具コーナーで児童向けのプレゼントを探しているらしかった。店員は10代後半のブータン人女性で、客は20代後半のインド人男性のように見受けられた。

店員「おにいさん、誰へのプレゼントですか？」

男性客「弟に。いいものがあるかな」

店員「あなたの弟にでしょ？あなたは私の兄弟だから、あなたの弟も私の弟みたいなものよ。あれはどう？」

男性客「悪くはないけど。ところで、君はどうやってヒンディー語を学んだんだい？」

店員「だってお客さんが話すんだもの。お客さんから学んだのよ。あとはテレビね。（インド）映画が好きよ」

店員のブータン人女性が積極的にヒンディー語で声をかけると、男性インド人客は嬉しそうに対応をしていた。女性店員は、衛星テレビで流れるヒンディー語映画や客との会話を通じてヒンディー語を習得したのであろう。彼女のヒンディー語には、インド人や西洋人の使うヒンディー語とも異なるアクセントがあった。ところどころ文法の誤りもあり、語彙も乏しかったが、インド人の男性客とテンポを崩さずに会話ができているところを見ると、ヒンディー語を使う機会はよくあるのであろう。

この書店のあった地区では、他にも多くのインド系、ネパール系の男性を見かけた。彼らはジーンズにシャツの洋装をしており、街中の広場や商店の出先にたむろしていた。夕方以降に男性4～5人でたむろしているインド人の（ブータンの人々よりも身長が高く、ジーンズとシャツという洋服姿で、ヒンディー語やその他のインドの言語を話している）男性は、平々凡々とした町の中で、少し浮いているような感じもした。

訪問団の泊まったホテルでも、テレビがつくところならどこでもインドのチャンネルが放送されていた。ヒンディー語で制作された、インド人向けの放送を衛星で受信しているのである。サンスクリット語の多いヒンディー語のニュースであったり、ボリウッド映画であったり、ヒンディー語版の「ドラえもん」を始めとするアニメが、ゾンカ語への字幕や吹き替えなしで受信できた。

それに対してゾンカ語のチャンネルの基本は、ニュースと、ドラマなどの娯楽番組の二本立てらしい。しかし、コンテンツ不足なのか、国のプロモーションビデオのような映像がたびたび放送されており、小学生の歌のコンテストの様子が繰り返し流されていた。

今回回った地域の中では、特に首都のティンプーにおいて、ネパール系、インド系の男性を多く見

けた。就労中は着用が義務である国民服のゴを着ておらず、20代から30代の独身男性が多く、ブータン人とは離れた所で数人のグループを作っていた。一方で、一目見てわかるインド人女性は極限られていた。

また、ワンデュ・ポダン新市街地でも、インド系の商店や住民を多く見かけた。近くでダムの大規模な工事が行われているため、急激にインド系の労働者・移民が集まっているという。

彼らの多くは、労働者としてブータンに出稼ぎに来ている男性である。道路工事やビルの建設工事といった肉体労働はブータン人に忌避される傾向にあり、これらの多くをインドから来た出稼ぎ労働者が担っていた。インド人にとっては、母国の数倍とはいかないものの良い賃金で、食事や住居の保証された手近な出稼ぎ先がブータンである。

ブータン人が「あそこにはインド人が多い」というとき、それは出稼ぎ労働者を意識しているのか、言葉尻に歓迎している様子は感じられなかった。それでも、彼らを多く受け入れている都市部では、当然インド人相手の商売が成り立っており、先ほどの店員のように、ヒンディー語を積極的に学ぶケースもあるのであろう。

結局、街中の書店では良い語学学習書には出会えなかった。ローマ字での発音記号のある書籍が見当たらなかったのである。外国人が買いに来るという前提がほとんど成り立っていないから仕方がない。

そのかわり、現地では質問すればみな丁寧にゾンカ語を教えてくれて、僅かな挨拶だけでも覚えていればとても喜んでくれた。何よりもゾンカ語習得の秘訣は、現地に飛び込んで身に付けることにある、と現時点では言えよう。

【所感】

ブータンではいわゆるインド英語とは異なる綺麗な英国英語が広く話されているとの前評判を聞いて、訪問団に望んだ。実際、高齢者を除けば英語はどこでも通じ、買い物や簡単な会話に不自由することはなかった。ただ、それ以上に驚いたのはヒンディー語の流通度の高さである。ネパール系の民族が多いと聞いていたので、ネパール語が話されていることは期待していたが、都市部でも地方でも、ヒンディー語を介する人を必ず見つけることが出来た。それは、出稼ぎ労働者からの影響であ

ったり、インドの衛星テレビであったり、また、ブータン人自身が、大学・大学院の進学先にインドを選んでいるという事情もある。

民家泊をしたサムテガンの家では、家主であるお祖父さん夫婦には、ゾンカ語とその土地の言葉しか通じないと説明を受けていた。私が小学生のお孫さんに英語で話しかけ、それをゾンカ語に訳してもらい、さらにお祖父さんの返答を英語に直してもらうというまどろっこしいやり取りをしていた。しかし、お茶を酌み交わすうちに、お祖父さんにはヒンディー語が通じることが明らかになった。とてもゆっくりで、アクセントがインドとは異なっていたが、それでも直接話せたことへの満足感は大きかった。ちなみに、孫世代はインドのテレビアニメを見ているのでヒンディー語を理解するが話す習慣はほとんどなく、祖父がヒンディー語を使えることを知らなかったそうだ。

孫世代に代表される進んだ英語教育は、国際化の流れにおける強みでもあり、一方で国語教育がおろそかにされるという危惧もある。ゾンカ語、地方語、ヒンディー語、英語といった多言語構造は、この国の豊かな文化を支える土壌でもあり、新世代の「ブータン人」のバランスが問われている。（担当：須永恵美子）

【参考文献】

- 1) ブータン政府観光局：ブータン政府観光局ホームページ、<http://www.travel-to-bhutan.jp/>, 2013年（2013年8月2日閲覧）
- 2) 宮本万里：『自然保護をめぐる文化の政治―ブータン牧畜民の生活・信仰・環境政策―』、風響社、2009年
- 3) 宮本万里：「仏教王国ブータン」のゆくえ―民主化の中の選挙と仏教僧、『南アジアの文化と社会を読み解く』、慶應義塾大学東アジア研究所、397-434頁、2011年
- 4) UNESCO：UNESCO Atlas of the World's Languages in Danger, <http://www.unesco.org/culture/languages-atlas/>, 2013年（2013年8月2日閲覧）

11. 歴史と文化

今回の訪問で私たちは、行く先々の寺院を訪れた。そこで目にしたのは、息を呑むような華麗な仏像と仏画の数々である。釈迦如来とともに描かれるチベット仏教の聖者たちは、ブータン人の篤い帰依の対象であり、精神的支柱である。ブータン人の「幸福感」を根底から支えるもののひとつは、この聖者たちの加護への揺るぎない信頼であると、今回の訪問を通して感じた。

そこでこの項では、聖者たちの中でも別格の存在である二人に関して見聞した知識や感想を述べることにする。それを通して、ブータンの歴史と文化について垣間見たことをまとめたいと思う。その二人とは、グル・リンポチェとシャプドゥン・ンガワン・ナムギェルである。

【グル・リンポチェ】

グル・リンポチェはインド人の高僧で、インドで生まれた仏教をチベットや他のヒマラヤ地域に伝えた。つまり、チベット仏教の開祖である。ブータンへは8世紀後半に、グル・リンポチェによって仏教がもたらされたと考えられている。ブータン人はこの聖人を、Second Buddhaとして篤く崇拝している。グルとは「師」、リンポチェとは「転生仏（生き仏）」の意味で、単に「グル」と言う場合もこの聖人を指す。パドマサンババとも呼ばれるそうだが、これは「蓮華から生まれた人」という意味である。

ブータンでグル・リンポチェを祀っていない寺院は存在しないと思われる。事実、今回の訪問で訪れたすべての寺院で、グル・リンポチェは本尊あるいは脇侍として必ず祀られていた。グル・リンポチェの像は、そのインド人らしいはっきりとした顔立ちによって、容易に見分けることができる。グル・リンポチェと特に深い所縁を持つ寺院のひとつに、パロ郊外のタクツァン僧院がある。ブータンの紹介番組で放映されたこともあるそうなので、知っているひとも多いかもしれない。絶壁の上にへばり付くように立つ、通称Tiger Nestである。私たちは日本を出発する前から、この僧院まで自分の足で登って参拝したいと切望していたのだが、時間の制約のため叶わなかった。が、諦めきれない私たちは「遠くからでよいからせめて一目見たい」とガイドのSonamさんに頼み、最終日の朝、空港へ向かう前の限られた時間に、タクツァン僧院のビューポイントへ向かった。

タクツァンは、8世紀にグル・リンポチェが初めてブータンへ飛来した時、着地した土地である。グル・リンポチェは八変化をもって布教をおこなったとされるが、土着の悪霊たちと戦う際にはとりわけ獠猛な姿に変身した。この地へ飛来した時、グル・リンポチェはその獠猛な姿で虎の背中にまたがっていたという。この事に由来して、この聖地はタクツァンすなわち「虎の巣」と呼ばれる。グルの飛来以降、タクツァンはチベット仏教の聖地として崇められ、現在でも世界で指折りの聖地である。17世紀に時のデシ（摂政）によって、この聖地にタクツァン僧院が建立された。1998年に建物は火災により全焼したが、本尊であるグル・リンポチェの像だけは不思議に無事であった。僧院を再建する際に本尊の位置を動かそうと試みたところ、突然雷が轟いた。元の位置に戻すと空は静まり、再度動かそうとするとまた雷が轟いた。人々はそのあらたかな靈験を畏れ敬い、本尊は結局元の位置のまま鎮座することになったのだと、Sonamさんは教えてくれた。さて、このビューポイントからはタクツァン僧院を望むことができ、同時にチョモラリ（7314m）の眺めを楽しむこともできた。この美しい山の向こうには、チベットがあるのだ。

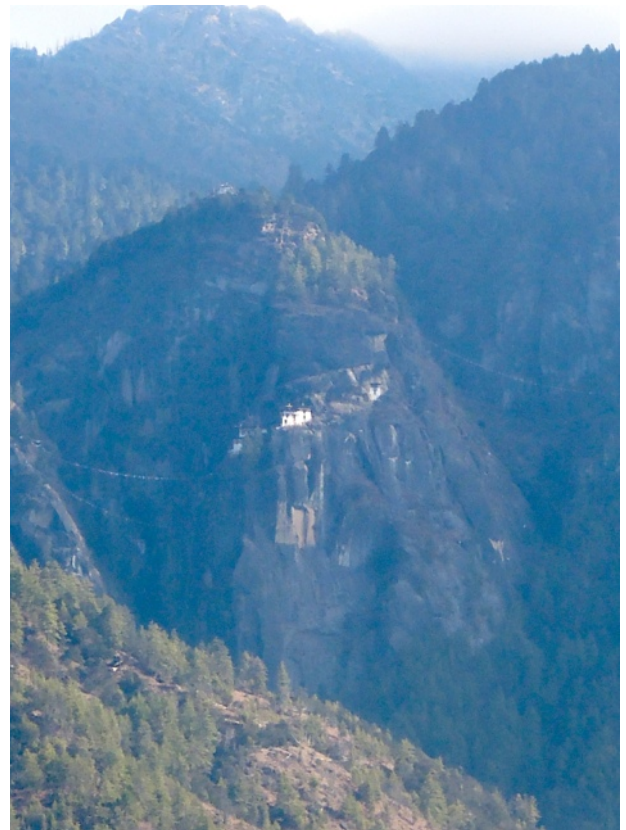


写真1 タクツァン僧院を望む

【シャブドウン・ンガワン・ナムギェル】

グル・リンポチェと並んで大多数の寺院で奉祀されているのが、シャブドウン・ンガワン・ナムギェルである。

シャブドウン・ンガワン・ナムギェル（1594～1651）はドゥク派の転生仏とされ、ブータン全国民から「建国の父」として崇められている。本名はンガワン・ナムギェルであり、シャブドウンは称号である（以下「シャブドウン」と書く場合は、ンガワン・ナムギェル本人を指す）。

シャブドウンは、チベットにあるラルン寺（ドゥク派本山）の座主であったが、チベット国内で起こった仏教諸派の激しい政権闘争から逃れるため、1616年西ブータンへ亡命してきた。シャブドウンは卓越した人格と政治力を発揮して、ブータン各地にゾン建立了し、それらを各地域の拠点として地域間のネットワークを形成した。それと同時に、国内反対勢力を鎮圧し、チベット軍やモンゴル軍の侵攻も撃退した。このようにしてシャブドウンは、群雄割拠だったブータンをついにひとつの国家にまとめ上げ、ドゥク派を国教とする「ドゥク・ユル（雲龍の国）」を誕生させた。ンガワン・ナムギェルの死後は、代々の化身がシャブドウンの称号を引き継いできた。この歴代シャブドウンを、宗教界を統括するジェ・ケンポ（大僧正）と世俗界を統治するデシ（摂政）のふたりが補佐するという国家体制が、1907年のワンチュック王朝成立まで続いた。

シャブドウンの像は白く長い顎鬚を持っており、容易に見分けることができる。今回の訪問では、シャブドウンと所縁の深いゾンのうち5つを拝観または眺望することができた。タシチョゾン、シムトカゾン、ワンデュ・ポダンゾン、プナカゾン、ドゥゲゾンである。以下この順に、見聞したことを述べていこう。

タシチョゾンはティンブー市内にあり、私たちが訪れた最初のゾンである。周囲はのどかな田園風景で、美しい棚田が広がっている。このゾンは国王のオフィスであり、国教ドゥク派の総本山でもある。さらに、内務省と財務省のオフィスもこのゾンの中にある。建立されたのはシャブドウンがやって来る前だったが、シャブドウンが所有した時に「タシチョゾン（最も栄光あるゾン）」と名付けられた。講堂内へ入ると、中央に大きな釈迦如来像が、その右手にグル・リンポチェ像が、左手にシャブドウン像が祀られている。

ティンブー南部にあるシムトカゾンは、シャブドウンが築いた最初のゾンである。私たちはこのゾン

を参拝こそできなかったが、サムテガンへ向かう道中車から降りて眺めることができた。このゾンは1629年に建立事業が開始し、完成後は西ブータンにおけるドゥク派の重要な拠点となった。前述のタシチョゾン、シムトカゾン、後述のプナカゾンという西ブータンの三大ゾンがネットワークを構成し、それがシャブドウンによる国家統一と体制維持に重要な役割を果たしたのである。このゾンは現在では、ドゥク派やゾンカ語などの教育機関として利用されているとのことだ。

ワンデュ・ポダンゾンは、サムテガンへ向かう車窓から、そしてサムテガンから戻って来てワンデュ・ポダンに一時泊った際にも、眺めることができた。しかし参拝することはできなかった。なぜならこのゾンは、昨年火災に遭って廃墟となってしまったからである。火事の際には軍隊が出動したが、強風に煽られ、建物を守ることはできなかった（ワンデュ・ポダンは風が強いことで有名で、もじって Windy Podan とも呼ばれるほどだ）。それでも軍隊の奮闘により、内部の貴重な財宝は大部分が助かった。なお、川を挟んだ向かい側には、ブータンで最も古いという集落がある。リンチェガンと呼ばれる集落で、シャブドウンがこのゾンを建設する際にインド人労働者を住まわせていた集落だということだ。

プナカゾンへは、ワンデュ・ポダンに滞在した折に訪れた。ポチュとモチュという二つの川の合流点に堂々と建つこのゾンは、1637年にシャブドウンがシムトカゾンに続いて2番目に建立したものであり、1651年シャブドウンが他界したのもこのゾンの中であった。シャブドウンと最も縁の深いゾンと言って良いだろうと思う。プナカゾンは、グル・リンポチェの予言を見事に現実化したゾンである。グル・リンポチェは8世紀に「ナムギェルという名の若い男が、象の眠っているような形の山にやって来て、象の鼻の先端の位置にゾンを建てるだろう」と予言していたという。そして、プナカゾンとその後ろの山は、まさしくその通りに見えるのである。

モチュ川にかかる橋を渡ってすぐの場所にゾンチュン（小さなゾンの意）と呼ばれる寺院があるのだが、この寺院は1328年、つまりシャブドウンが来る約300年前に、あるインド人聖者により建立された。ここには、次のような逸話がある。シャブドウンはゾン建設に取りかかるにあたって、バレブという名の大工にゾンチュンの仏像の前で眠るよう命じた。その晩、バレブは夢の中でゾンの完成

した姿を見た。そして、その夢の通りに建設されたのが、このプナカゾンである。

ゾンの講堂の近くに、マチェ・ラカン（「秘密の寺」の意）がある。この堂内にはシャプドゥンのミイラが安置してあるとされ、ゾンの中で最も神聖な場所である。シャプドゥンは1651年に他界したが、その死を公表すれば新生国家の不安定要因になるとの危惧から、事実50年以上も内密にされた。一般民衆に対しては、シャプドゥンは瞑想のために籠っているのだと告げられていた。なおマチェ・ラカンの中に足を踏み入れることが許されているのは、現国王、前国王、ジェ・ケンポ、および2名の世話係の計5名だけだ。それ以外は誰一人として、たとえ王妃であっても、中に入ることは許されない。国王もジェ・ケンポも、就任後すぐにこの御堂を参拝し祈願の儀式をおこなう。

ドゥゲゾンへは最終日の朝、パロ空港へ向かう前に訪れて外観だけ眺めた。1647年シャプドゥンがチベット軍撃退を記念して建立したものだが、1951年に火災に遭い廃墟となった。資金不足のため再建されずに現在に至っている。



写真48：シャプドゥン

【参考文献】

- 1) 地球の歩き方12-13 ブータン, ダイアモンド社
- 2) 幸福大国ブータン, ドルジェ・ワンモ・ワンチュック著, 今枝由郎訳, NHK出版



写真49：タシチョゾン



写真50：プナカゾン

【所感】

渡航前にメディアを通して見えていたのは、「幸せの国」ブータン、自殺やうつ病をはじめ心の病が社会問題化する日本。いったい何がこのような違いを生んでいるのだらうと思っていた。そして訪問を通して実感したのは、ブータン人の幸せの根本にあるのは信仰心だということだ。信仰を持っているかどうか。そして、日常生活がその信仰の上に成り立っているかどうか。それ以外にブータン人と日本人の違いは、私には見当たらなかった。そして、社会の絆が希薄だと言われる現在の日本と、それと対比される「古き良き昔」の日本を比べてみると、一番の違いはやはり「信仰心」ではないだろうか。であれば、私たちの社会が「幸福感」を取り戻す鍵は「信仰心」なのかもしれない。そして「信仰」とは、必ずしも特定の宗教に帰依することではなくて、自分が生きているのは「おかげ様」であることを知っていることなのだろう。

（担当：加畑理咲子）

12. おわりに

ヒマラヤに憧れを持つ私にとって、ブータンはいつか訪れたい国だった。ひょんな幸運から第2次隊で訪問する機会を得たが、今から思えば、あのときはサムテガントレッキングコースを歩いたのだった。今回10回めとなった派遣団であるが、日程が少し長めになり滞在型となった。一つのところに滞在して、村人とじっくり交流するというのが目的だ。フィールドワークに慣れているメンバーだったからか、皆それぞれの視点から地域の方々と交流して帰ってくることができた。現在でも学生さんとキャンプ地付近に住む住民とが文通するなどの交流が続いている。また、この夏、サムテガンBHUのHAであるRinzin氏が来日された際にもメンバーと再会を果たした。今後もこの出会いを通じて交流が続くことを願っている。

最後に、このような機会をくださった京大ブータン友好プログラム世話人の先生方、坂本龍太先生に深謝いたします。

（担当：藤澤道子）

【資料】

第10次ブータン友好訪問団公式行動記録 (加畑 理沙子、谷 悠一郎)

概略

本項においては第10次ブータン友好訪問団の行動を記す。原則的に、時系列で示している。時差については、協定世界時（UTC）に対して、日本がUTC+9、経由地であるタイはUTC+7、ブータンはUTC+6であるため、それらについては適宜記すようにしている。

1月18日（金）

日本出発、バンコクでトランジット

09:00 関西国際空港集合 [UTC + 9]

10:50 関西国際空港出発

・タイ国際航空 TG623便

15:40 バンコク・スワンナプーム国際空港 [以降 UTC + 7]

・送迎バスでホテル移動

16:30 Regent Suvarnabhumi Hotel

・到着後各部屋にいて荷物整理など。バンコク市街地へ。

1月19日（土）パロ着、ティンプーへ移動

05:00 ホテルに集合・出発

05:20 バンコク・スワンナプーム国際空港

05:55 チェックイン

07:30 バンコク・スワンナプーム国際空港出発

・Druk Air KB123便

10:40 ガヤ空港到着

パロの初雪のため天候回復までガヤ空港待機

12:05 トランジットルームへ移動・待機

13:35 ガヤ空港出発

14:40 パロ空港到着 [以降 UTC + 6]



パロ空港にて
ティンプーで会議予定のため正装

15:25 パロ空港を出発

16:40 ティンプー市街にあるホテル PHUNTSHO PELRI 到着

・Lhomen ToursのMr. Karchungに挨拶

18:00 夕食

・保健省のDr. Dorji、ティンプー病院小児科医の西澤和子先生にブータンの医療や国の概要についてお話を伺う。

19:45 集合写真撮影



ホテル PHUNTSHO PELRIにて

20:00 各自部屋へ、もしくは街へ出かけるという形で解散。

1月20日(日) ティンプー観光、病院見学

09:00 出発

09:10 メモリアル・チョルテン（第3代国王追悼記念碑）

・第3代国王（1972年ナイロビで客死）の母君が1974年に建立。

・人びとはマントラを唱えながら、チョルテンの周囲を右繞している。4つの悪い感情（無知、貪欲、妬み、嫌悪）を手放し、マントラを唱え続けることによって、悟りに近づく。

09:50 メモリアル・チョルテン 出発

10:05 クエンセルポダン（ビッグ・ブッダ）

・2007年に建設開始。高さは約60-70ft。今後1-2年で完成の予定（仏像の内部が寺になる）。

・仏像の額には、シンガポール人富豪から寄付されたダイヤモンドが埋め込まれている。

・ティンプー市内を見渡すことができる。



メモリアルチオルテンにて



ビッグブッダ



ビッグブッダにて

11:20 モティタン動物園（ターキン放牧場）

- ・鹿とターキンを見ることができる。
- ・ターキン（頭がヤギで、体が牛）は、divine mad man（ドゥクパ・クンレ。14世紀、仏教の戒律をあえて破った独特の布教をおこなった）によって創造されたとされる。



ターキン

12:30 アートスクール学生によるハンドクラフトショップ

- ・芸術学校の最終学年の学生が作った製品を販売している。



ハンディクラフトショップ

13:15 Orchid Restaurantにて昼食

14:15 タシチョ・ゾンのビューポイント1（尼僧院のふもと）

14:20 タントン・デワチェン尼僧院

- ・タントン・ギェルポ（ブータンに鉄鎖の橋を建てた高僧）が瞑想した場所に建立された。



デワチェン尼僧院（修行中の少女達）



タシチョゾン

14:45 タシチョ・ゾンのビューポイント2
・田畑、ゾン、山すべてをおさめられる景色のいい場所。



タシチョゾンを望む



タシチョゾンの中庭

15:00 タシチョ・ゾン

- ・ティンブー病院小児科医の西澤和子先生が合流。
- ・ゾンには、国王オフィス・中央僧院・内務省・財務省が入っている。
- ・向かいにある建物は、国会議事堂と外務省。ほかの官庁は周辺の平屋にある。
- ・近くで宮殿の外観の写真を撮ってはいけない。
- ・ゾンの堂内や国旗降納を見学した。

16:15 Thimbu National Referral Hospital

- ・院内見学（小児病棟・ICU・PICU・NICU）
- ・2013年7月1日より、ブータン医科大学が開校予定。既にRUBにある看護科と健康科学科（RIHS: Royal Institute of Health Sciences）、および新設の医学科を合わせて、独立した医科大学を作る。ティンブー国立病院の院長である Dr. Kinzang P. Tshering が初代学長に就任予定。



王立ティンブー病院

17:20 王政百周年記念市場（サブジ・バザール、ホンコン・マーケット）を訪問



王政百周年記念市場（野菜中心の品揃え）

18:10 ホテルに戻る。

18:40 夕食

20:30 解散

1月21日（月）：サムテガンへ移動

土曜の初雪のため、月曜が国民の休日となり、ティンプーでのミーティングはキャンセル。

09:00 ホテルを出発

09:35 シムトカ・ゾンのビューポイント

・シャブダウン・ンガワン・ナムギェル（17世紀）が建立した寺院のうち、最も古い。現在は、仏教とゾンカ語の学校となっている。

10:05 ホンツォ（Huntso）の検問所

10:15 検問所出発

10:25 ドチュ・ラ

・3150mの峠（寒い！）。

・第4代国王戦争勝利記念 Cholten（108塔）

・マサ・ガン、ガンカ・プンスムを含む Greater Himalaya を見渡すことができる。



ドチュ・ラから望む山々
(ガンカ・プンスム 7570m、ブータン最高峰)



ドチュ・ラにて

11:05 ドチュラ・カフェ

・バター茶を飲んだ。

・マサ・ガンに上った京都大学山岳部が寄贈した望遠鏡で、ヒマラヤ山脈を眺める。マサ・ガンの頂に登頂記念旗がはためいているのを望遠鏡で確認できる。



ドチュ・ラ カフェからの眺め

13:10 ロベサ ビレッジ・レストランにて昼食

- ・窓から見える棚田が非常に美しい。

14:10 ロベサを出発

- ・吉原と藤澤は坂本と共に、ワンデュ県知事・保健部長を訪問。

- ・それ以外のメンバーは、棚田のあぜ道を歩いてチミ・ラカンへ。

14:45 チミ・ラカン

- ・14世紀にDivine mad manにより建立された。
- ・2012年7月9日の地震のせいで、寺の壁にひびが入った。
- ・少年の僧侶が、男根をかたどった棒（Divine mad manが使った武器）で頭を軽くたたいてくれる。浄化の意味がある。
- ・この寺が立つ丘の形が乳房に似ていることから、子宝に恵まれる寺とされる。国内外から多くの旅行客が、子を望んで拝みに来る。



チミラカンの外観

15:30 寺を出発

15:50 車に戻り出発、サムテガンへ。

- ・ワンデュ・ポダンを経由した。

17:15 サムテガンのキャンプ地に到着

- ・テント組と民家組に分かれた。
- ・民家組（女性4名）
 - ・自己紹介し、バター茶をいただく。
 - ・家族は5名：Zomchu（85歳女性）、Tandin Pem（Mrs. Zomchuの娘）、Kuenga（74歳、Mrs. Tandin Pemの夫）、Sonam Yeden（Mrs. Tandin Pemの娘）、Sonam Chuki（Mrs. Sonam Yedenの娘、7歳、3年生）、Karma Yeden（Mrs. Sonam Yedenの娘、6歳、2年生）。Sonam Yedenさんと二人の女の子はティンプー在住で、冬休みなのでサムテガンに帰省していた。



キャンプ地

（各自独り用テント。緑は食事用の大型テント）

18:30 キャンプで夕食

20:00 夕食終了後は、

- ・テント組
 - ・星を眺めたり、JICAの関係者から話を聴く。キャンプ地そばにある建設中民家の閉め固め作業にも参加。
- ・民家組
 - ・家族団欒に加わり、Mr. Kuengaの経歴を聞き驚く。Mr. Kuengaはこの地域の名士で、第4代国王に仕えていた。42年前、第4代国王にお伴して日本を訪問した。

1月22日（火）：サムテガン滞在 BHU・村散策

07:40 朝食

08:15 朝食が終わって、出発準備。

09:50 1軒目の農家（Mrs. Dema）

- ・Mrs. Demaというおばあさんの話を聞く。Mrs. Demaは寅年なので、64歳くらいと思われる。9人家族で住んでいる。この村では持ち回りでサムテガン・ラカンの管理を担当するが、今年はこの家の番である。豚や牛を飼っており、バク・シンという木の葉っぱを細かく切って牛のえさにしていた（下の写真）。



10:15 出発

10:25 2軒目の農家（Mrs. Phub Gayam）

- ・大きな家で、豪華な仏間がある。
- ・ミルクティー、ザオとシップという米を炒ったお菓子をいただいた。



ミルクティーとザオ

12:10 キャンプ地に戻る

12:50 昼食

昼食後は、自由行動。

この後、一部の団員（谷・道和・丸山・須永）は散歩に出かけ、道中にあった農家（Ms. Sonam）を訪ねる。また、別の団員（平田・小野）も散歩に出かけ、道中の大きな農家で親戚などの集まりに混ざっていただくことになった。これらの交流は、ガイドが案内することのない偶然の出会いによって生まれたものである。



農家の前で集合写真

18:00 キャンプファイヤー・夕食

- ・BHUのRinzinさん、Lekiさんも一緒に、アラを飲みながら歌い明かす。



キャンプ地での夕食



キャンプファイヤーでの集合写真
（全員アラを手に）

22:00 解散

1月23日（水）：サムテガン滞在 BHU・患者の家、寺院・村散策。

07:50 朝食

08:50 BHUに到着、BHU内部を見学



BHUでのミーティング



BHUでの青空診療



セイガン・ハガンでの集合写真

この日はその後、二手に分かれた。

1.寺院・村散策

2.BHU診療・患者宅訪問

となり、それぞれについて以下に記す。

1. 寺院・村散策

09:45 BHUを出発

11:00 寺院（セイガン・ハガン）に到着
・地域のお寺



セイガン・ハガン



サムテガンの棚田

13:10 キャンプ地に戻る。

13:15 昼食

14:10 再びBHUへ

14:35 村役場へ

・村役場の職員の方からサムテガンについての話を
うかがう。



村役場

15:20 サムテガンの隣の地域であるゲレカへ出かけ、見学する
17:00 BHUに戻る。
17:15 農林業事務所にて職員の方から話を聴く。

2. BHU診療・患者宅訪問

09:20 BHU前の広場で診察

11:30 BHUを出発

11:40 キャンプ地にて昼食

12:40~13:15 Rinzinさん・Inrlaさんと、車でSheng Sabuへ移動。（BHUから約6km上った村）

13:30~13:50 Kaka Dukpaさん（village health worker）の家で、ミルクティーをいただく。おじいさんの診察。

14:00~14:55 患者宅で、おばあさんの診察。



患者宅 2

17:00~17:40 再びKaka Dukpaさんの家で、スジャをいただく。おばあさんの診察。

18:00~18:40 車でキャンプ地へ戻る。

19:00 キャンプ地で夕食

21:30 飲み会

・BHUの3名のスタッフ（Rinzinさん、Lekiさん、Inrlaさん）が加わる。アラを持ってきてくださった。

1月24日（木）：サムテガンからポブジカへ。

07:30 朝食



患者宅 1

15:10~16:15 別の患者宅で、おばあさん・赤ちゃんの診察。



キャンプ地での朝食

・その後、お世話になった民家の方やサムテガンBHUに挨拶に行く。



サムテガンBHUでの集合写真

09:15 車に乗り込み、サムテガンを出発。

10:20 Teki Agona BHUに到着

・ご挨拶。ミルクティーをいただく。BHU内を見学。



テキアゴナBHU

11:25 屋外で昼食

・Lhomen Toursのcockさんによる昼食としては最後。田んぼでの優雅な昼食（下写真）。



11:50 出発、ポプジカへ向かう。

14:05 ラワ・ラ付近で降り、ヤクや遊牧民のテントを見る。



ラワ・ラのヤク（野生のわりに泰然としている）



遊牧民の作業場用テント
（ヤクの毛で作られている）

14:25 ガンテ・ゴンパ

・高僧テントン・ペマ・リンパの孫により、17世紀に建立されたニンマ派寺院。テントン・ペマ・リンパとは、グル・リンポチェの財宝を発掘した高僧。現在の住職は、9代目の化身。

・この寺院では毎年11月に、オグロヅルの飛来を祝う祭りが開催される。

・オグロヅルはチベットへ旅立つ際に、ガンテ・ゴンパの上を3周してポプジカに別れを告げるとされている。

・在家層（ゴムチェン）が門前町を形成している。



ガンテ・ゴンパ

15:15 オグロヅル生息地に到着
・湿地帯。ツルは11月から2月にかけてポプジカに飛来する。



ポプジカ谷での集合写真



餌をついばむオグロヅル

15:35 ケベタン自然研究センター
・オグロヅルを望遠鏡で観察。

16:05 ポプジカBHUに到着



ポプジカBHU

16:55 Dewachen Hotel到着



ポプジカのホテル（Dewachen Hotel）外観

18:30 夕食

20:00 夕食が終わる

1月25日（金）：ワンデュ・ポダン、プナカ

07:00 朝食 朝食後、ポプジカを散歩



ポプジカ谷の朝。霜が降り、大変寒い。

08:00 出発

・オグロヅルが飛んでいる姿や啄ばむ姿を間近で見ることができた。

08:45 ラワ・ラ（峠）

・道中、ジョモラリを見ることができた。

10:40 1回目の休憩

11:15 2回目の休憩

・川沿いを歩く

12:05 ワンデュ・ポダンDragon's Nest resortに到着。

・プナツァンチュ川沿いのホテル。

12:30 ホテルにて昼食

・2011年の火事で廃墟となったワンデュゾンが、窓から見える。



ワンデュのゾン

14:00 ホテルを出発

プナカゾンのビューポイント（川の合流点）にて写真撮影。

・モチュ（女川）・ポチュ（男川）の二つが合流して、プナツァンチュになる。ポチュはもともとはゾンのすぐ側を流れていたのだが、1994年の氾濫の後、ゾンを保護するために経路変更工事をおこなった。ゾンの後ろの山は、象が眠っているような形をしている。象の鼻の先端にゾンが建っているように見える。



プナカ・ゾンの外観

15:00 プナカ・ゾン

・1635年に、シャプドゥンにより建立。シャプドゥンが建立したゾンのうち、2番目に古い。

・プナカゾン内部を見学。

・マチェ・ラカン（秘密の寺）：この寺に入ることができるのは、世界に5人だけ（現国王、前国王、ジェケンポ、2名の世話係）。シャプドゥンの御遺体が安置してあるという。戴冠式、結婚式の際にはこの寺で儀式がおこなわれる。

・本堂：本尊は仏陀像。右にシャプドゥン像、左にグル・リンポチェ像。壁面には、ブッダの一生を示す物語が描かれている。



プナカゾンの橋で少年僧たちと



オグロヅルの飛翔



プナカでの集合写真（後方にプナカゾン）

16:55 プナカを出発

クルタン（商店街）を經由してワンデュ・ポダンに向かう。

17:35 ワンデュ・ポダン新市街（バジヨ）

・インド系の人たちを多く見かけた。



ワンデュ・ポダンの新市街



ワンデュ・ポダン県知事夫妻、高僧と会食
（吉原、藤澤、坂本）

18:20 ホテル

18:00 吉原、藤澤、坂本はワンデュ県知事主催晩餐会へ

18:40 夕食

21:00頃 解散

1月26日（土）：ティンプー、パロ

08:00 ティンプーへ出発

09:30 ドチュ・ラにて休憩。

10:20 ブータン保健省とのミーティング会場へ
（Thimphu National Referral Hospital内）

11:20 ミーティング開始

- ・ブータン保健省からはブータンにおける医療の現状および今後の展望についてプレゼンテーション
- ・京都大学側からは吉原団長による医療情報の概要およびその実践についてのプレゼンテーションを行った。

- ・その後、意見交換や質疑応答を行い、集合写真を撮影。



ミーティング風景

13:00 終了

13:15 時計塔広場

・Lhomen ToursのMr. Karchungがご挨拶に来てくださった。



時計塔広場

13:20 昼食。ローカルレストランでモモを食べる。

14:10 パロへ出発。

14:15 チャンリミタン弓道場にてダツェを見学



ブータン式アーチェリー（ダツェ）

15:10 チュゾム（川の合流点）

・パロチュとティンプチュの2つの川が合流して、ワンチュになる。ワンチュの下流には、チュカ水力発電所がある。

・3つの異なる形のチョルテンが並んでいる（チベット式、ネパール式、ブータン式）

15:40 タチョガン・ラカン

・14世紀に、高僧タントン・ギャルポにより建立された。タントン・ギャルポは、チベットからやってきて、ブータン各地に鉄鎖の橋を建設した。橋を作り民衆の生活に实际的な貢献をしながら、布教活動をおこなった。



吊り橋で会った子供たち。
小さい子以外は英語が通じる。



タチョガン・ラカン

17:00 パロ市内 チェンチョハンディクラフト
・織物の実演、土産物



民族衣装を購入



最終日の夕食

17:40 ジグメリン・ホテル
・民家宿泊組（加畑、道和）は、民家へ。

1. ホテル宿泊組

19:00 夕食 20:30 夕食後酒屋や土産物屋へ
21:10 これまで吉原が撮影したビデオの上映会や
総括を行う
・途中、ホテルが停電した。ブレーカの焼き切れ
が原因。

2. 民家宿泊組

19:00 ホテルから車で15分ほどの民家着
・築100年以上の大きな民家、立派な仏間
19:30頃 夕食
21:00 居間でおばあさんにご挨拶。家族ととも
に、インドのドラマを見ながらくつろぐ。

1月27日（日）：ブータンを発つ

1. ホテル宿泊組

07:00 朝食
08:00 荷物を預ける

2. 民家宿泊組

07:00 村を散策
08:00 朝食
08:40 ホテルへ向かう

その後、ホテルにて全員が合流し出発した。

09:20 タクツァン僧院・チョモラリのビューポイン
ト

・タクツァン僧院：グル・リンポチェが8世紀に初
めてブータンを訪れたとき、まずこの場所にトラに
乗って飛来した。以来、この地域は聖地として崇め



タクツァン僧院（タイガーネスト）

られてきた。タクツァン僧院自体は、16世紀に建立された。1998年に全焼したが、グル・リンポチェの像だけは不思議と無事に残った。

09:45 出発

09:55 ドゥゲ・ゾン（ドゥゲとは勝利の意）

- ・1649年、シャブドゥンにより建立。
- ・1950年（第3代国王の治世）、火事により全焼。資金不足のため、再建はされていない。
- ・車道の終点。ここからはチョモラリ・トレッキングとなる。

10:50 パロ空港

11:10 チェックイン

11:30 ブータン銀行で両替。残金のヌルタムを1200バーツに両替（円の準備がなかったため）。
・12:35に搭乗開始のはずが、2時間以上待つことに（機材の関係？）。

14:45 搭乗

14:55 パロ空港出発

Druk Air KB140便

- ・途中、インドのグワハーティー国際空港を経由してバンコクに向かった

19:30 バンコク・スワンナプーム国際空港到着

[UTC + 7]

- ・トランジット
- ・全員で、空港のタイ料理レストランで夕食。



チョモラリ：7200m ブータンで2番目に高い山

23:15 搭乗

23:25 バンコク・スワンナプーム国際空港出発
タイ国際航空 TG622便

1月28日（月）：帰国

06:15 関西国際空港到着。入国審査・税関

07:10 関西国際空港1階ロビーにて解散



パロ空港での集合写真。ブータンともお別れ。

第10次訪問団 写真、ビデオリスト

項目クリックでネット接続

1) 写真 (Google+)

大仏像公園

ブータン (自然)

王立動物園 (ハタオリ少女)

ブータン (交通)

クラフトショップで呉を買う

ブータン (医療)

交通警察ティンプー市内

ブータン (食)

尼寺の少女修行僧たち

ブータン (人々)

ティンプーゾン

ブータン (町、村、建物、施設) - 1

2013年1月21日 (月)

ブータン (町、村、建物、施設) - 2

ティンプー出発

子供達

2) ビデオ (Youtube)

ティンプー〜ドチュラ峠

2013年1月18日 (金)

ドチュラ峠

バンコク空港〜ダウンタウン

ドチュラ峠〜サムテガン

2013年1月19日 (土)

サムテガンテント場

バンコクホテル〜空港

2013年1月22日 (火)

バンコク国際空港離陸

サムテガンの朝

バンコック〜ガイヤ

サムテガンBHU

ガイア〜パロ

サムテガンBHU周辺

パロ空港

サムテガン村

パロ〜ティンプー

サムテガンテント村

ティンプーホテルにて

キャンプファイヤー

2013年1月20日 (日)

2013年1月23日 (水)

メモリアルチョルテン

サムテガンBHU前庭にて

2013年1月26日（土）

サムテガン近郊の村 1

サムテガン近郊の村 2

ワンデュボタン～ティンプー峠道

ドチュラ峠

2013年1月24日（木）

GoodByeサムテガンBHU

サムテガン～プナカ

将来医者になりたい少女

谷の少女達

道路工事

野生のヤク

ガンテ・ゴンパ

オグロヅルケベタン自然研究センター

ポプジカ デュアチェンホテル

ティンプー病院（プレゼンテーション）

ティンブ-時計台広場

アーチェリー

2013年1月25日（金）

ポプジカ村バス停

ポプジカ出発 工事あり

ポプジカ～ワンデュボタン

ワンデュボタン

ドラゴンネストホテル

プナカ ゾン